

## 平成29年度「産業と社会」「キャリアデザイン」「 校外学習」実践報告

著者	北原 立朗, 塗田 佳枝, 安達 昌宏, 福田 美紀, 小澤 真尚, 山本 直佳, 高畑 啓一, 嶋田 昌夫
雑誌名	研究紀要
巻	55
ページ	1-30
発行年	2018-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00152939">http://hdl.handle.net/2241/00152939</a>

# 平成 29 年度「産業社会と人間」「キャリアデザイン」 「校外学習」実践報告

北原立朗・塗田佳枝・安達昌宏・福田美紀  
小澤真尚・山本直佳・高畑啓一・嶋田昌夫

本校の1年次生は、様々な体験や活動を通して「これからの社会の中で自分はどう生きるのか」を考えていく。3月のカナダ校外学習を見据え、必修科目「産業社会と人間」と「キャリアデザイン」（総合的な学習の時間）で行った活動を中心に、本年度の実践を報告する。

キーワード：産業社会と人間、キャリアデザイン、校外学習、科目選択、国際理解、キャリア教育

## I 年次の目標

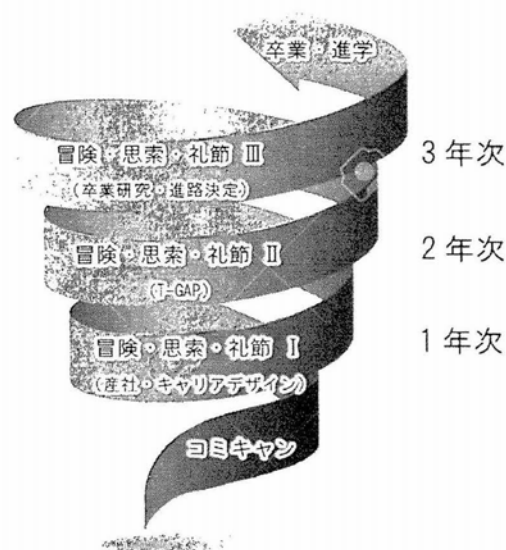
### 1. 「冒険・思索・礼節」の活動による「全局面的な人間性」の育成

現代は社会が多様化し、国レベルでも個人レベルでも価値観の共有が困難な時代と言われている。この混沌とした世界で次世代の若者たちに必要なことは何か。それは「どのような状況に置かれようともどのような価値基準に照らされようとも、常に周りとの調和し、つながりを見出すことができる柔軟な思考と、たとえ周囲と異なっても自らの考えを表明できる確固たる信念を同時に併せ持つ全局面的な人間性」である。

本年度1年次（24期）生はこの人間性の養成を卒業時の目標とし、目標を具現化するキーワードとして「冒険・思索・礼節」を設定した。「冒険」とは未知なるものに対して主体的に行動し、与えられた知識でなく体験を通して学び取る姿勢、「思索」は物事を深く掘り下げ、表面的な理解ではなく高い抽象度を用いて探究する思考、「礼節」は多角的・多面的に周りを見渡し、無数の価値や視点を見出そうとする態度を表す。これは本校の生活目標である「自由・自律・自覚」にもそれぞれ対応している。

右は3年間の学びを示したイメージ図である。卒業まで年次ごとにキーワードに沿った活動を繰り返しながら目標に向けて上昇していく。実は

個々の活動自体は目標に向かうツールに過ぎず、活動を通して、あるいは活動から派生する新たな考えや変化、可能性などの「つながり」を見出すことに価値がある。活動のキーワードは3年間同じであるが、内容は年次が上がるごとに広範化かつ細分化され、より高い達成度が要求される。例えば鳥瞰する視点なら、スズメの眼からトンビの眼、そしてタカの眼へと変化する。具体的には1年次の視点は「自分」に留まり自己理解が中心となるが、2年次は「地域や社会」に目を向けた課題の発見・解決、3年次はさらに広く、学問及び国の枠組みを超えた「世界」に対する研究実践に取り組んでいく。



## 2. 1年次の取り組み

本校の1年次には「産業社会と人間」と「キャリアデザイン」が置かれている。前者は2年次以降の科目選択、後者は学習や社会的スキルを身に付けることを主眼としているが、双方ともキャリア教育を下敷きにし、主体的かつ協同的な活動形態をとるという共通点がある。さらに平成26年度にスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）に指定され、27年度以降は1年次3月にカナダへの校外学習が入った。26年度以前の校外学習は2年次12月に実施していたため、2年次の「総合的な学習の時間」で事前学習ができたが、1年次で実施する場合、LHRだけでは時間が足りず「産業社会と人間」「キャリアデザイン」にも校外学習の要素が加わることになった。本年度も実施日時を交換したり、「産業社会と人間」の時間にカナダに関する学習を行ったりするなどして、柔軟に計画することにした。

その両者で目指すのは、混沌とした世界を生き抜く人間としての基盤を作ることである。このことは意識には上らないが生徒自身の内に存在している学ぶために必要なやる気や興味、好奇心等を引き出すことと言い換えられる。たとえるなら、内在する興味や好奇心は「土壌」である。豊かな土壌の上に実る作物の質が高まるように、確固たる基盤があれば学びも広く深くなっていく。その基盤を作り上げるのが、1年次で必要なことと考え、カリキュラムを構想した。

## Ⅱ 「産業社会と人間」の実践について

### 1. 科目の位置付けと本年度の基本構想

「産業社会と人間（以下、産社）」は総合学科の必修科目に指定されており、科目選択や進路決定を考える上で要となる科目である。文部科学省が定める「産社」の目標は、シンプルながら要求される内容は多岐に渡っており、カリキュラムの設定に際しては全国の総合学科で多くの検討を重ねてきたことであろう。本校においても「産社」は1年次における重要科目として位置づけら

れ、生活目標「自由・自律・自覚」を学ぶ大切な時間になっている。

今、この時代にどのように生きていけばいいか。この問いに対する「正解」はないが、このような時代に生きていくための準備はさせなければならない。従来の「産社」では、自己の特性を知り、自分の身の回りの「世界」の中でどう生きていくかを考えさせるところに主題があった。しかし本年度は、さらに広く遠く物事を捉える視点を養いたいと考えた。そのためには未知の体験、自分の持っていない思考方法、気づかなかった他とのつながりなどに目を向けさせる必要がある。そこで、それらを可能にする活動を単元に取り入れ、一つの単元の入口と出口、単元間のつながりを重視してカリキュラムを組織し直した。さらに、あらゆる価値観や他との「分別」を自在に横断し、自分の未来に無限の可能性を見出させるため、その中心的概念に東洋思想の極致である「空」を据えた。実際の活動ではイントロダクションに時間をかけ、単元に意識的に取り組ませた。

次節からは、本年度の主な単元について学期ごとに述べていく。末尾の「年間指導計画」（資料①）もあわせて参照されたい。

## 2. 1学期 —キーワード「冒険」—

### （1）コミュニケーションキャンプ

本校では入学翌日から長野県黒姫高原で3泊4日の「コミュニケーションキャンプ」を実施している。このキャンプは「産社」のカリキュラム内に位置づけられ、総合学科における学習のガイダンスとしての役割がある。クラスごとの活動は2日目夜のレクリエーションと最終日の昼食作りのみで、他はクラス・男女混合の10名による活動班で行い、野外活動やマウンテンバイク専門のインストラクターが班に1名付く。

18回目となる本年度のキャンプで行った主なアクティビティは、①アイスブレイク、②マウンテンバイク、③森散策、④班活動である。このうち②と③は、奇数班と偶数班で2・3日目に交代で実施する。年次のキーワード「冒険・思索・礼

節」に関して、特に②③は「冒険」、④は「礼節」に焦点を当ててアクティビティを計画し、しおりや初日夜の年次集会で示した。以下、それぞれについて述べていく。

#### ①アイスブレイク

黒姫に到着した午後、初めて活動班で顔を合わせて行う活動である。活動班2班をインストラクター1名が担当し、共同作業を通して初めての仲間とコミュニケーションをとり、これからの活動を進めるにあたって必要な関係性を作っていく。

#### ②マウンテンバイク

マウンテンバイクで野尻湖を一周する。渡された地図を見て急勾配の坂道に行くか、平坦な道に行くかなど、活動班内で話し合っってコースを決定し、ホテルに帰還することを課した。インストラクターには安全面の確保やコース決定のフォロー役に徹してもらい、生徒自身が主体的に考えて行動し、体力差やバイク技術を補い合いながらミッションを達成することを目指した。

#### ③森散策

地図を頼りに、積雪の多い黒姫高原周辺の森に隠されたカードを探し、指定された地点の宝物を手に入れるというミッションを与えた。ミッション終了後は恒例の、森の中で1人になって自分と向き合う「ソロ」も入れた。本年度は、スノーシューを着用し、雪深い中でも自由に進むことができるようにした点も特徴と言える。マウンテンバイク同様、インストラクターはフォローに徹し、



スノーシューを履いて森の中で宝探し

地図とコンパスを頼りに生徒たちが協力し合っってゴールすることを目指した。特に2日目の班は濃霧の中の散策で迷う班が多く、中間地点に到着した最も早い班と遅い班では2時間ほどの差があった。

#### ④班活動（班の目標設定と報告会）

例年のキャンプでは班長・副班長は中学校の活動状況を見て教員が指名していたが、本年度はアイスブレイクを終えた初日の夜に班内で決めさせることにした。まず全体会の中で、これから始まる活動の心構えを伝えた。それは「たまたま集まったメンバーと3日間過ごし、協力しながら意味のある時間を作っていく＝チームを作る」ことであり、4日目に報告会を行うことを発表した。続いて班で集まり、新しく決まった班長を中心に目標を決めた。目標はしおりの日誌欄にも記入する欄を設け、自分と班がどのように取り組んだかを常に意識させるようにした。

3日目の夜は、発表内容と方法について全体に指示した後、活動班に分かれた。班ごとにローソクの明かりを囲んでそれぞれのふりかえりと班での3日間について話し合い、報告会に向けて構想を練らせた。発表は1班3分、内容は①最初に立てた目標、②2日間のうち伝えたいエピソード1つ、③自分たちの班を表す一文（語）と理由、④チーム名をA4用紙3枚にまとめ、実物提示装置を使って説明する。

最終日は、30分ほど準備時間を取ってから報告会に入った。雄大な自然の中での様々な体験を通してどのような班になったかを語る生徒からは、これからの学校生活を自分自身で切り開き、他者と協力しながら多くのことに挑戦しようとする意気込みが感じ取れた。

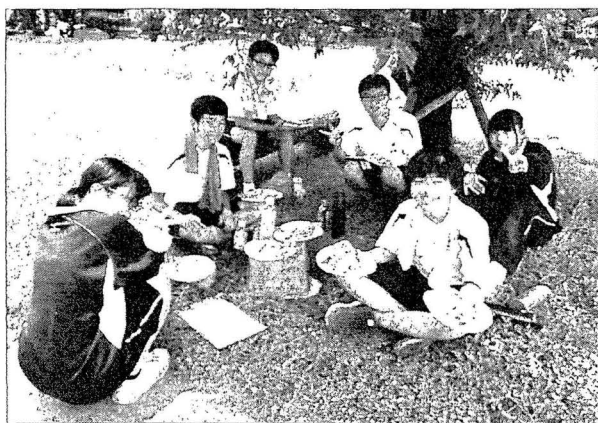
#### （2）菜園作り

菜園作りは、キャンプ後に学校に戻ってきて最初に行う活動である。本年度はキャンプの活動班でトウモロコシと枝豆を栽培した。本単元のねらいは、①作物の生育調査を通して植物の生命の意義を理解する、②食育を通して野菜や食料の重要

性に気づき生活のなかで食を大切にする気持ちを育む、③各班の畑で栽培することにより責任感を育むとともに班組織での連携力を高めるの3点である。

具体的な活動内容は以下の通りである。①（4月3週目）ガイダンス・播種・覆土・かん水・ベタかけ、②（5月1週目）ベタかけ外し、③（同3週目）間引き・土寄せ・かん水・除草・生育調査、④（6月1週目）看板作成・間引き・土寄せ・除草・生育調査、⑤（同3週目）摘果・土寄せ・除草・生育調査、⑥（7月3週目）収穫祭（片付け・ピザ作り・昼食会・ふりかえり発表会）。

このうち、栽培管理・生育調査については6回を必修とした。実際の指導では教員が各クラスの産社係や活動班長に作業内容と注意点を説明し、班長が班員に伝達するという方法をとった。日々の管理作業は各班で自主的に行わせ、分からないことや疑問に思ったことは教員に相談するよう指示した。ふりかえり発表会では、栽培の面白さや苦勞、収穫の喜び、チームワークの大切さを発表した班が多かった。



収穫した作物でピザ作り

### （3）探求①社会について 単元名：「自在への階梯 ～To the Unlimited and Beyond～」

社会において様々な知識や技能、考え方を身につけていく上で大切なのは、自らの思考を常識で縛らないことである。この点を入学後間もないうちに伝える必要があると考え、例年行っていた夏季休業中の職場体験を、将来の生き方や目指す方向性を自ら考えさせる内容に再構成した。

具体的な活動は、①「生き方カルテ」を作る、②プロフェッショナルの話を聞く、③職場・施設訪問である。この3つの活動は、生徒自身の将来像をふくらませ、職業や労働に対する既成概念を取り除き、自らの「夢」を見出すための足掛かりとなることをねらって設定した。

#### ①「生き方カルテ」を作ろう

まず自らを医師のような視点で分析し、現時点の自分の将来像や目指す生き方の方向性をカルテ用紙（資料②）にまとめた。このカルテをもとに少人数のグループでディスカッションを行った。互いの将来に向けた考えや目指す職業などを意見交換することで、将来に対しての意欲が高まりイメージが大きく広がることとなった。

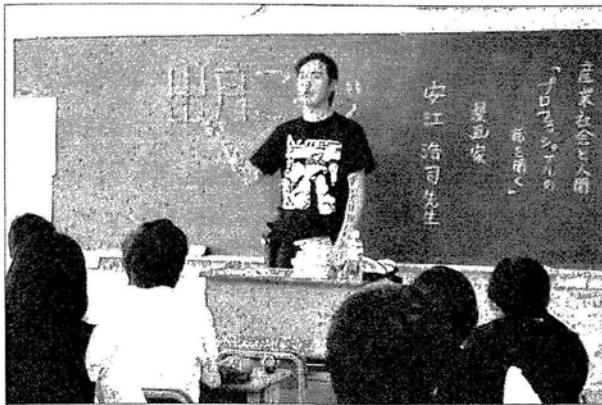


将来を語り合うディスカッション

#### ②プロフェッショナルの話を聞く

生徒の保護者に呼びかけ、ゲスト講師として授業をお願いした。保護者は日頃、様々な分野で活躍する、言わばその道のプロフェッショナルである。そういったプロのリアルな体験に基づく仕事の内容や喜びを直接語ってもらうことで、生徒たちの将来像をさらに深化・拡大することをねらった。賛同して集まってくれた保護者の職業分野は様々で、バラエティーに富んだ講師陣を結成することができた。生徒は事前の希望調査で調整した会場に分かれ、2人の講話を聞いた。当日は各講師から、それぞれの職業の具体的な内容や人生における大切なことなどが熱く語られ、生徒も積極的に質疑を行っていた。また教員と保護者の間で高いレベルの共同活動を行ったことで双方の理解がより深まったことは、今後の教育活動におい

で非常に大きな収穫であったと言えよう。



プロフェッショナルの話を聞く(漫画家)

### ③職場・施設訪問

上記の事前学習を終え、実際の訪問計画に移った。まずカルテに書かれていた興味のある職業分野で8会場に振り分け、それぞれの希望を発表させた上で3～6人の活動班を作らせた。前年度までと異なり、本年度は生徒自身が訪問先を決め、交渉から計画・実施まで主体となって行うという方法に変更した。変更の理由としては、まず学校側が用意した体験先に生徒の希望する職種がなかったり、受け入れ数等の関係から第1希望の体験先でなかったりして意欲的に取り組めないという従来の問題を改善することが挙げられる。もう1つは、生徒自身の力で訪問先を開拓する「冒険」を体験させたかったからである。

なかなか交渉が進まず苦勞する班もあったが、最終的には全ての班が訪問先を決めることができた。

訪問先で見聞きしたい・体験したいことを計画書にまとめた班は教員による審査会に進み、当日の活動を許可されて実施するという仕組みとした。夏季休業中の訪問日に教員は緊急時の対応



職場訪問ポスター

のため学校に待機していたが、幸いどの班も大きなトラブルはなく無事に活動を終えることができた。

夏休み明けのふりかえりでは、それぞれの内容を紹介する資料を作成し、ポスターセッションを実施した。班の中で発表側と聞く側に分かれて行ったが、特に実際に体験したということで自信に満ちた態度で発表していたのが印象的だった。一連の活動を通して、生徒たちが意欲的に将来像を描き、多様な職業に対する理解を得たのはもちろんであるが、それ以上に体験を通して物事を学ぶ大切さを知ることができたのが大きな収穫と言えよう。

### 3. 2学期 —キーワード「思索」—

#### (1) 探求②自己について 単元名：「無限への回廊 ～Corridor to the Infinite World～」

2学期末には2年次以降の科目選択を決定しなければならない。科目選択に向けて生徒に必要なのは、自らの内面を深く見つめ直すと同時に、これまでの価値観から脱し、自分というものを再発見する「思索の時間」である。そのため「自分とは一体何だろう」「生きるって何だろう」という哲学的な命題を皆で共に考える活動を計画し、2回のディスカッションを設定した。

初めのディスカッションで行ったことは、1年次生全員による「無限」をテーマとした語りである。「人間が思考したことは実現する、これは是か非か」という命題を皮切りに自由に意見をやり取りしたところ、「思考に制限はない」という考えにたどり着いた。これは自らの思考の制限を外し、思考をコントロールするトレーニングにもあった。

その後、「未開の才能」と名づけた小グループによるディスカッションを行った。5・6限でメンバーを変えて「筑坂に来て変わったと思うこと」や「将来のイメージ」などをテーマに自由に語り合わせた。キャンプの活動班とHRクラスによるグループだったため、気兼ねなく自分の思いや迷っていることを話し合い、今後の進路に向けての



“無限”をテーマにしたディスカッション

意見交換の場にすることができた。ただ語り合う時間が十分に取れず、話し合いが深まる前に終わった班が多かったのは反省点であった。

## (2) 筑波大学見学

「産社」で例年行われている単元であり、活動内容に大きな違いはほとんどない。本年度とりわけ重視したのは、事前に意識をできる限り高めさせることである。そこで本単元の副題を「叡智の回廊」と名づけ、筑波大学を通して学問という巨大な知の体系を体で感じることを目的とした。当日は希望した分野の講義を実際に受け、関連施設を見学した。多くの生徒が授業内容に興味を持ち、また広大な筑波大学に圧倒されていた。ふりかえりによると、筑波大に通っている本校卒業生の講話が非常に参考になったようである。やはり生徒に近い目線によるアドバイスや大学生活の実際を先輩から聞いたことには意義を感じやすい。この体験から大学を初めとする進路への関心が一段と高まった様子が見て取れた。



筑波大学での卒業生講話

## (3) 特別支援学校との交流会

毎年、これまでの価値観が変わる生徒が多い単元である。クラスごとに筑波大学附属学校を中心とした特別支援学校と交流し、何らかの障害がある相手とのコミュニケーションをとる方法を体で学ぶ。交流前は「どのように接していいかわからない」「フォローはどの程度すればいいのか」という不安を多くの生徒が抱えていた。しかし実際に体験してみると、「相手に障害があることを忘れ、普通に楽しんでいる自分がいた」「自分たちよりもずっと楽しそうに生活していた」との感想にもあるように、これまで関わりが少なかったために障害者に対してネガティブなイメージを一方向的に持っていたことに気づき、それを大きく変化させた生徒が多かった。聴覚特別支援学校との交流では、古い付き合いの友人のように仲良くなり、別れを惜しんで写真を撮り合っていた。



特別支援校との交流会

以上のように2学期の単元では自らのこれまでの考えと向き合い、深く「思索」することを主題としたが、その意味は活動の前後の考え方の変化を生徒自身が感じることにある。この「自分は変われる」という実感を思索によって抱くことが、主体的に学ぶ力の基盤となる。これらの単元を終えた後の科目選択は、入学時や1学期に考えた時間割から大きく変わることになる。全く異なる分野に興味を持ったり、自分が本当にしたいことが分からなくなったりする生徒も少なくなかった。しかしこれは良い意味での変化と言える。なぜなら、これまで漠然と考えていた自分について深く

考え、真剣に対峙したことによって生まれた変化だからである。

#### 4. 3学期 —キーワード「礼節」—

探求③つながりについて 単元名：「縁起の海で生きるために ～*Universe Is in Us*～」

3学期は「産社」においても総仕上げの時期である。これまで多くの体験から学んできたことを自らの中で結実させ、2年次から始まる科目群を中心とする学習に活用できる形にしなければならない。同時に1年次のハイライトの行事であるカナダへの校外学習が成功するかどうかも試されている。

3学期の活動は、「私の人生論」を1600字でまとめ、4分間で発表するというシンプルなものである。科目選択時の決意や将来設計を文章にまとめる活動は「ライフプラン」作成として例年行われてきた。本年度は、生まれてから今日までの自らを取り巻く様々なつながり（「縁起」）を意識させ、過去や現在そして未来における他との関係の中でどのように生きていくべきかを考えさせた。そこから見出してほしかったのは、自分が良いと思ったことも悪いと思ったことも全て「縁起」となって現在を形成しているということである。それにより、周りにある全てのことに感謝して接することができるようになる。これが3学期のキーワードである「礼節」の体得である。

作文を書く前には、複数のワークシート（資料③）を使って準備させた。十分な時間を取って考えさせたため、自分のこれまでの人生をふりかえる機会となったようである。中にはあまり思い出したくない過去や、見たくない自分の側面に向き合うことに苦悩した生徒もいた。しかし、そのような思いは自分だけではないということに今回の活動を通して気づき、活動が進むにつれて前向きに作文に取り組むことができていた（資料⑦ [b]）。

「私の人生論」発表会は3回設定した。初めは4時間を使って各クラスで全員が発表する。基本的な形式は朗読であるが、ポスターやパワーポイ

ントを使った発表も許可した。クラスの中の優れた発表をMVPとして選び、教員評価も加味して代表を決定する。このメンバーは年次全体による発表会に進み、そこで評価の高かった生徒が研究大会で発表する。

年次代表に各クラスから選ばれた生徒は12名である。この年次発表会では、これまでの自分の人生をふりかえる者もいれば、人生における大切なことを考察する者、「縁起」に関する持論を述べる者、これからの未来について語る者など、様々な角度から「人生論」を展開していた。ここから、研究大会で発表する3名の代表を選考した。

研究大会で、1年次は「私の人生論」の代表者3人の発表をメインとした。が、その発表に先立ち、有志数名が本年度の活動を報告した。発表内容は基本的に生徒たちが決め、教員はアドバイスをするに留めた。その結果、単純な活動紹介でなく、自身の変容や授業への提言など、生徒ならではの興味深い内容となった。

「人生論」の発表は、年次発表会から内容、パワーポイント（以下、PPT）ともに改良され、自信に満ちた態度で行っており、来場者からも好評だった。特に従来の「ライフプラン」に対して、自らの人生に対する考えを発表するという「論」を展開していたことに大きな関心が持たれたようである。

本単元を通じて、一人一人が自らの「人生論」に真剣に向き合うことができた。また自らの過去の体験や出会いから現在の自分へのつながりを意識し、良いことも悪いことも合わせて自らの人生であるという認識を持つに至ったことが発表の中に随所に見て取れた。ある1つの現象の中に多くの見方や価値を見出そうとする姿勢は様々な文化や思想が混在する今日の社会に生きる我々にとって極めて大切であり、今後の学習でも深めていく必要がある。

#### 5. まとめ

以上、本年度の「産社」の主な単元を学期ごとに紹介してきた。程度の差はあるが、どの生徒も



様々な体験を通して着実に変わってきている。これまでの「産社」で生徒たちが考えたこと・感じたことの一部をふりかえりから以下に引用する。

#### 【1学期】

- ・コミキャンを通して最初はお互い緊張でガチガチだった空気があつという間に仲良くなり、その後の学校生活でもすぐに打ち解けることが出来た。コミキャンでの関係が今でも続いているのがとてもうれしい。
- ・菜園づくりではたくさんの協力が生まれた。水をやったり雑草を抜いたり、一人では出来ないことがたくさんあるからこそ、協力することの大切さと楽しさを学んだ。
- ・生き方カルテを書くことで自分はどのような人間なのか、これから何をしたいのか、何に興味があるのかを真剣に考えることができた。
- ・「プロフェッショナルの話を書く」では漫画家の先生に「夢に向かって挑戦したことは経験として残る」という言葉で無理だとあきらめかけていた夢に挑戦しようと思った。
- ・ディスカッションでは言おうかどうしようか迷ってなかなか自分の意見をはっきりと持てなかったことが反省点だった。次からはもっと自信を持って発言したいと思った。
- ・菜園の記録や、職場体験のアポ取りを人任せにしまった。次からは積極的に勇気を持って自分で動いていきたい。
- ・産社は自分の紹介や夢などについて真剣に向き合う時間が長かったように感じた。授業をしていく中で将来が今までより鮮明に見えてきたように感じた。

#### 【2学期】

- ・職場訪問のポスターセッション発表会では、みんな自分の活動内容を誇っている様子が見てとれて、とても良いと思った。
- ・特別支援校との交流会では衝撃を受けた。今まで障がいを持っている人と関わったことはなかったためコミュニケーションが取れない人という偏見があった。しかし彼らは何事にも全力で積極的に取り組み、そんな彼らの様子を見ていてこっちが元気になれた。
- ・筑波大学見学でもものの見方や考え方が2学期で大きく変わったと思う。人間は成長できる、ということを知ること

が出来た。

- ・「無限」をテーマとしたディスカッションでは何か一つが正しいということではなく、お互いが自由に話せることはとてもありがたかった。自分も相手にとっても有益な経験を得ることにつながった。
- ・反省点として、様々な活動に対してもっと事前に準備しておけばよかった。前からもっと余裕を持って準備していたらせつかくの活動がもっと有意義にできたと思う。
- ・科目選択ではとても悩んだ。進路も含めて一時は最初の思いと違う選択を考えたが産社での体験を経て結局もともと決めていた時間割にした。今ではとても納得できている。

#### 【3学期】

- ・人生論では1600字と聞いて最初は多いと思ったけど、考える程これまでの人生を全部語り切れなくてどこのエピソードをピックアップするかすごく悩んだ。
- ・過去をクラスで話すというのは過去に少し自信が持てるし、心を開いた気持になるのでお互い聞けてとてもよかった。
- ・一つのテーマに対してディスカッションをする場合、一つのグループだけで行うのではなく、違うメンバーで複数回行くと内容がさらに深まると思う。
- ・「人生論」をはじめ産社の活動を通して自分の意見が持てるようになった。
- ・大人の「人生論」も聞いてみたい。私達より人生を長く生きている人がどう思っているかを知りたい。
- ・これが“自分と向き合う”ことなんだ、ということを知ることができた。そこに新たな発見がありこれからはつながっていくと思う。
- ・人生論では自分の思い出したくないことを思い出して辛かった。無理に過去と向き合わせることはないやり方や仕組みを変えるのはいかがでしょうか。
- ・私の人生論を書け、と言われたとき嫌な過去と向き合わなくてはいけなかったが、苦しくても自分と向き合ったことで夢の原点を改めて考えることができた。
- ・産社の意義は周りの世界を広く知ったうえで、自分について深く考えさせてくれるもの。

上記からは、産社の活動を通して生徒の中にあつた価値観が様々な形で変容していく様子があ

かがえる。特に1学期は様々なことにチャレンジし、多くの人との出会いや体験を通して自らの夢や進路に向かって視野を広げられた。また他者とのディスカッションが、漠然としていた自らの進路にある程度の方向性を見出すきっかけになったようである。課題としては、グループ活動で班長に任せきりになってしまうなど生徒によって関わる度合いに差が出たことが挙げられる。また菜園活動の収穫祭では各グループのふりかえりが浅いものに留まった。活動のねらいについて事前に理解を深めさせればさらに効果的な活動になったのではないかと。

2学期は当初の計画通り、多くの思索の時間となった。科目選択という現実的な目的の前に設定した特別支援学校との交流や大学見学、生徒同士のディスカッションではこれまでの価値観がリセットされ、戸惑った様子も見られた。しかしそれこそ教員がねらったことである。周囲から勧められるままに決めるのではなく、自らの生き方や進路を決断するという作業にしっかり向き合わせるために必要だからである。多くの体験や情報の中で迷いながら、それでも決定していくことには覚悟を要するが、再三記してきたように正解のない中から選択することは多様化する社会に必須の能力である。ふりかえりによると、生徒の中には深く思索している者もいた。そうした考えを交流させる機会を設ければ、さらに一人一人の考えを深めることができたのではないかと。

3学期は「私の人生論」が中心だったが、生徒の多くが自らの過去に一区切りをつけ、新たな気持ちで次に進むという節目となったようである。また「人生論」に取り組むことで、産社の目標の1つである「産業社会における自己の在り方生き方について考える」ことについて、一人一人が自分なりの答えを出すということができていた。同時に他の生徒の「人生論」を聞くことによって、多様な価値観や考え方、生き方を知ることができたのも他者理解につながる成果である。ただ「人生論」の事前準備として行った、これまでの自分を振り返る「マンダラ」作成において、一部の生

徒にある種の辛さを強いたことには検討の余地がある。誰しも思い出したくない過去というものには存在する。今回の「人生論」では「陰の縁起」としてあえて向き合わせたのが、それによって不安を掻き立てられた生徒がいたことも事実である。それらの生徒に今回のような活動を行わせる意味や今後への影響について、検証していく必要がある。

本校では「産業社会と人間」のカリキュラム作成は当該年次の教員に委ねられている。年度によって内容が変わっているように見えるが、教員から押しつけられた学習ではなく、体験の中から生徒自身が大切だと思ったことを主体的に学び取り、自らの将来につなげていくという理念は共通している。また、「自分の中にある可能性に気づき、それを広げられた」という認識を生徒自身が実感として感じ取ることも大切な要素である。なぜならそれこそが「成長」であり、自らを高め、反省する術を「体得した」ことになるからである。これらのことや時代の要請を考慮しつつ、カリキュラムの更なる検討と改良を試みたい。

### Ⅲ 「キャリアデザイン」の実践について

#### 1. 教育課程上の位置付けと本年度の概要

##### (1) 平成27年度以降の「キャリアデザイン」

平成23年度から始まった1年次必修科目「キャリアデザイン（以下CD）」であるが、27年度からは「総合的な学習の時間」として実施することになった。それに伴い、時間帯は隔週土曜日1限～3限から毎週土曜日の1・2限に変更され、担当者の数も年次団に年次外の教員が加わった12～14名から年次団8名に減った。もう1点変わったのが目的である。そもそも「CD」は、「卒業研究」までを見据えた本校での学習をスムーズに進めるための学びのスキル、ソーシャル・スキル、マネジメント・スキルを身につけることを目的に設定された。しかし27年度以降は1年次にカナダへの校外学習があることから、事前学習を通して「地球市民性の醸成を目指」すことも目的

に加わった。それを達成するために、どこに焦点を当てるかは当該年次によってやや異なる。次に示したのは、27年度・28年度が重点項目として育成を目指した資質・能力である。なお丸数字は便宜上筆者が付したもので、両年度とも資質・能力は並列的に挙げられている。

【平成27年度】①セルフ・マネジメント力  
②学びのスキル ③課題発見・解決への考え方  
④地球的視野に立った考え方

【平成28年度】①人間関係形成・社会形成能力  
②自己理解・自己管理能力 ③課題対応能力  
④キャリアプランニング能力 ⑤イノベーション創出に向けて必要な資質 ⑥グローバル人材に必要な資質

27年度は、主体的学習に関する能力（上記①②③）と地球市民性（④）に大別できる。一方28年度は学習より大きく捉えた自己形成（②③④）と、社会参画に必要な資質・能力（①⑤⑥）に主眼が置かれている。

## （2）本年度の基本構想

本年度は27年度に近く、①調査の基本を体験しながら学ぶことで学びのスキルを身につける、②校外学習の事前学習を通して視野を広げ、多様な価値観の中で主体的に生きる態度を養うという2点に重点を置いた。1年次であること、自己形成・人間関係形成力は「産業社会と人間」で行うほうが本年度の計画では効果が見込めること、校外学習を充実させることが主な理由である。

特に平成26年度以前の「CD」の流れを汲む①では、「自分で調べることの面白さに気づかせる」ことを重視した。個人の興味・関心に基づくテーマを試行錯誤しながら調べることで、知的好奇心を育み、主体的な学びにつながっていくと考えたからである。生徒には年度当初のガイダンスで、(a)自ら調べることの面白さを体感する、(b)筑坂での学びのスキルを身につける、(c)校外学習を充実させるために必要な知識や態度を身につけるという3点の目標にして示した。

## （3）年間計画

1学期は、調査を行う上で必要なリサーチ・スキルのガイダンスと、個人で調査しレポートにまとめる活動を設定した。上記目標(a)(b)について、役割分担が必要なグループではなくまずは個人で行い、基礎を身につけさせる。2学期以降は1学期に学んだことを生かしつつ、重点は徐々に目標(c)に移行する。2学期は、まずカナダに関する基礎知識を学ばせるため、グループによる文献講読・発表を行う。次に文献講読で担当したテーマについてPPTで発表させる。合間には筑波大学の東南アジア留学生との交流活動も設定した。3学期は、当初はトロント市内のエスニックタウンの1つを担当し、タウンの特徴やその母国について調べながら自主研修の計画を立て、価値観の異なる人々とどう生きるかを考えさせる予定であった。しかし8月の下見で実行するのが難しいと判断し、トロント市内の自主研修の行程作成に変更した。年間計画は資料④に示した。

「CD」の基本構想や年間計画もまた、I章で挙げたキーワード「冒険・思索・礼節」に対応している。1学期の調査は、今後必要になる基礎的なスキルについて試行錯誤しながら理解していく。2学期はカナダについて調べるだけでなく日本や他の国と比較することでさらに深く思考する。3学期は班員と協働してテーマを考え、一様に与えられた時間に自分たちだけの価値を見出そうとする活動である。以下、各学期の詳細を述べていく。

## 2. 1学期

### （1）リサーチ・ガイダンス

「CD」や「卒業研究」など年次で行う授業で調査やレポート作成に取り組みさせる際、どのような事前指導を行うかは大きな課題である。筆者が担当した年次の多くは、全体で心構えやポイントを説明し、あとはゼミに分かれて担当教員が個別指導を行っていた。しかしこの形態では教員間の差が大きく、生徒の不満も出やすい。1人の教員が年次全体に向けて指導することもあったが、大

教室では講義形式にせざるを得ず、一人一人に届きにくい。

そこで本年度は、担当者8名が4クラスを回って生徒とやり取りをしながらガイダンスを行うことにした。具体的には担当者が2名ずつに分かれ、①農業系／生活系の研究の特徴、②工業系／人文系の研究の特徴、③レポート・発表のしかた、④テーマの決めかた・進めかたの4つのテーマをそれぞれ1時間で説明した。①②は本校の科目群に対応しており、過去の「卒業研究」を使いながら説明した。③についてもある卒業生の1年次から3年次までのレポートの実物を用い、改善点や良い点を考えさせた。このように、過去の成果を学習材として使える点は「卒業研究」20余年の蓄積がある強みである。加えて本年度の1年次の教員が専門教科・普通教科とバランス良く配置されていたことも、各自の得意分野で事前指導が行えた理由の1つと言える。

さらに「卒業研究」まで使える探究学習のテキストとして『学びの技－14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』（後藤芳文ほか、玉川大学出版部）を持たせた。実例が多く、生徒が自習する上でも使いやすい。さらに1学期に最低限守らせることを、段落のある文章・引用のルール・質疑を含む発表のマナーに絞り、各担当者が共通して指導することにした。

## （2）個人調査

個人調査では、無作為に作ったクラス混合の20名グループを1名の教員が担当した。6月の4回を調査や発表準備の時間にあて、7月には調べた内容について発表3～5分、質疑3～5分（1名の持ち時間8分）の中間報告会を行う。正味6時間の活動時間しかないため、できる範囲のテーマを設定するよう注意し、1冊の本を読んでまとめるブックレポートも許可した。報告会は討議しやすいようにグループを10名の班に分け、発表できない班はレポートを作成させた。発表資料はパワーポイント・実物・写真など使用も含めて任意とする。報告会でもらった他者からのコメントを元

に、最終的に1200字以上2枚以内のレポートにまとめた。

レポート作成や発表を初めて体験した生徒が多かったが、学んだことも多かったようである。レポート批評会まで終えた時点で書いた「ふりかえり」では、「レポートはただ調べて書けばいいものだと思っていたが、構成や内容の分かりやすさなども考える必要があって大変だった」「（調べる上で）計画をきちんと立てることが一番大事だと思った」などの記述が見られた。そして構想時に重視した探究の楽しさに言及する生徒もいた。「自分の身近なところでできるテーマだったので調査していてとても楽しかった」「やっけていくうちに提出の為の作業でしかなかったものが探究心をくすぐって調査がだんだん楽しくなってきた」。本格的に取り組むのは初めての生徒がほとんどであったレポートも発表も、確かに不十分などころは多い。しかし自ら知る楽しさを感じられれば、それが次の調査をより良いものにしよとする動機づけになるだろう。

## （3）レポート批評会

9月に入って、レポートの批評会を行った。ねらいは、他者のレポートを読み、興味を広げたり良いレポートを考える参考にしたりすること、また評価表（資料⑤ [a]）を用いて実際に評価してみることで評価の観点を知ることにある。手順は以下の通りである。①レポートを読み、コメントを付け合う（5人×4班）、②チェック表を配り、評価のポイントを説明する、③自己評価、④2～3人で相互評価、⑤教員がチェックしたレポート（評価表は任意）を返却する、⑥ふりかえり・共有。

①では体裁や論理性の評価より、面白いと思った点、疑問点や質問、改善へのアドバイスを見つけてさせることに重点を置く。自分の書いたレポートだけで善し悪しを判断することは難しいため、まず他者のレポートを読ませ、大まかな基準を形成させた上で評価に取り組みさせた。しかし、その評価も教員の評価には及ばない。現時点の水準で

満足せず、「卒業研究」や卒業後にも使うことができるスキルを身に付けさせるため、自己評価・相互評価の後に教員の評価を伝えることにした。

「ふりかえり」ではガイダンスで示した目標(a)(b)以外に、他者からのコメントで自分のレポートが良くなること、上手なレポートや発表を取り入れたいことなど、他者に学ぶ大切さへの言及が複数見られたことも興味深かった。さらに「(他のレポートを読んで)その人がこんなことを好きなのかとか、(あるテーマについて)知っていたけど、こんなふうにできていたんだなあと思うことがたくさんあった」「(同じテーマでも)それに関する感じ方は様々でそこがレポートを個人的で面白いものにしていてと思った」など、他者が調べた内容を純粋に楽しむ指摘も見られた。今後も自他ともに楽しみながら調査の質を高めていくことを期待したい。

### 3. 2学期

#### (1) カナダリサーチ・ガイダンス

2学期は、校外学習の訪問先であるカナダについて基礎的な知識を得る活動を中心に行った。目的は1学期に学んだ調査に関するスキルの定着・深化とともに、カナダに関して興味を持ち、世界や身の回りの物事を多面的にみる視座を獲得することにある。訪問先について知ることは校外学習への意欲を喚起し、内容をより充実させることにもつながっていく。

カナダリサーチ・ガイダンスでは「カナダについて調べ、日本と比較することで視野を広げる」ことを2学期全体の活動のゴールとして生徒に提示し、カナダの基礎知識、カナダの独自性、今後のカナダリサーチで扱うテーマ(後述)の紹介を行った。続いて、9月から本年度に加入したカナダ人留学生が高校生の視点でまとめたカナダのスポーツ、ポップカルチャー、日常で感じる多文化主義に関する発表を聞かせた。最後に、2学期「CD」の主な活動である文献講読やカナダリサーチに向けて、生徒の参考となるように教員が実際に文献講読のレジュメを作成し、発表のデモ

ンストレーションを行った。

#### (2) 文献講読

1学期の個人調査では、初めての調査だったことや時間の制約も関係するであろうが、Webの情報や友人への聞き取りだけで安易に終わらせる生徒も少なくなかった。そこで文献を読み、解釈し、人に伝えるという文献講読の活動を設定した。1学期と同様、教員が生徒20名を担当するが、その中で3~4名の6班を作った。講読のテキストには『はじめて出会うカナダ』(日本カナダ学会編、有斐閣)を使用し、「カナダの文化・芸術」「カナダの教育」「カナダの農業と農作物」「カナダの環境問題」「日系カナダ人」「日本とカナダ」「移民政策・多文化主義」「カナダの先住民」「カナダの社会保障」のいずれか1章を各班が担当した。班のメンバー及び取り扱う章(テーマ)は無作為に決定し、メンバーやテーマに左右されず主体性を持って活動し、興味・関心を高める有意義な時間とするように心構えを説いた。

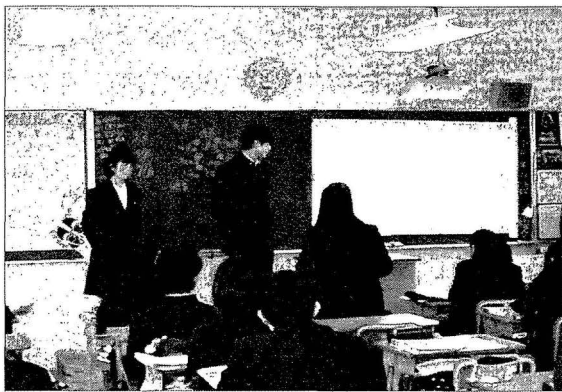
生徒はグループで協力しながら担当の章を精読後、レジュメにまとめて発表した。レジュメは、①章の要約、②このテーマと関わる日本のことについて調べた内容(任意)、③興味を持ったこと・疑問に思ったこと・さらに調べてみたいと思ったことの3点からなる。①でA4用紙1枚、②③でもう1枚を目安にまとめさせた。発表時間は1班あたり10~15分、質疑・ディスカッション10分程度とした。他の班の発表や質疑によって、担当以外のテーマについても学ぶことができた。

#### (3) カナダリサーチ

続いて担当したテーマの中で、文献講読で得た知識やレジュメに記した興味・疑問、発表で他班から受けた質問などからトピックを決め、調査結果と考察をPPTにまとめて発表させた。発表会は同じトピックを扱うグループが集まって発表し合う「分野別」、文献講読発表を行ったグループ内で行う「分野混合」の2回実施した。発表形式は共通とし、1班あたり8分(発表時間5分、

質疑3分)の発表とした。PPTを用いたグループ発表は、1年次の授業の中で初めての体験となる。そこで1回目の分野別発表会は2回目のリハースルと位置づけた。他に、テーマについてある程度の共通理解があるため、より有意義な質疑が可能となるとのねらいもあった。

実際に、分野別発表会では同じテーマを扱いながらも着眼点や解釈に差異が生まれ、異なる結論が導き出されたケースもあった。このように他のグループの発表を聞くことも多様なものの見方や考え方に気づくことにつながるであろう。



分野別発表会での質疑応答

分野別発表会でもらった他班からのコメントやアドバイスを参考に、必要に応じて追加調査や資料の改良を行い、分野混合発表会に臨んだ。発表会では内容・資料・態度に関する評価項目を示し、各班を評価させた(資料⑤ [b])。終了後は教員による評価表を配布し、自分が付けた評価と比較させた上で、2学期のふりかえりを行った。

ふりかえりからは、効果的な発表資料の作り方や発表者のマナーに意識が向いたことがうかがえる。また「全然社会保障なんてわからなかったけど、その分たくさんの疑問が生まれたし、他の班の発表を通してカナダのことを深く知ることができた」など、担当したテーマ以外にも興味を持った様子が読み取れた。一方で、生徒同士・教員からのフィードバックが不十分ではなかったことは課題として残る。複数回の発表機会を設けたことで自身の発表を顧みる機会があったと思われるが、分野混合発表会を除いて具体的な改善点を教員が指摘したり、生徒が話し合ったりする

時間をとることができなかった。

#### (4) 東南アジア学生との交流

2学期のカナダリサーチの間に「産社」との共通单元として、東南アジア学生との交流「AIMS Meet and Greet!」を行った。本校には年に2回、AIMS (ASEAN International Mobility for Students: ASEAN 各国の人材育成を図る留学プログラム)で筑波大学に留学している東南アジア学生が来校する。この機会を活かし、自分とは異なる言語・文化を持つ人と何とかしてコミュニケーションをとる、英語でインタビューをする、日本・カナダに加えてもう1カ国について知ることをねらいとした交流学习を実施した。具体的にはカナダリサーチの20人グループに3~4人のAIMS学生を迎え、次の2つの活動を行った。

- ①多言語ワークショップ(最初にAIMS学生の母語で説明される出身国や文化について聞き、その後と同じ内容の英語の説明を聞いて答え合わせをする)
- ②英語でのインタビュー(カナダリサーチで扱っているテーマを中心に、AIMS学生の出身国の状況をインタビューし交流する)



英語でのインタビュー

ほとんどの生徒は日常的に外国人と触れ合う機会が少ない。よって「産社」の授業時間に事前学習の時間を設け、留学生の母国の基礎情報について調べ、英語での質問を準備してから本活動に臨んだ。

交流を通して、生徒は留学生の国に対して関心を持ち、互いに伝え合う喜びを感じることができ

た。さらに「日本とカナダやそれ以外の国では言語も違えば歩んできた歴史も文化も違う。違う国々の人が深く交流していけるようになるのは多文化理解をすることが大切なのではないかと思った」「(留学生に)『英語は話せるほうがいい』と言われたことがとても印象に残っている。今の社会には英語が必要不可欠で、英語という言語で自分の世界観が変わると感じた」など外国語習得の意欲や多文化共生に関する気づきも見られた。

#### 4. 3学期一カナダ自主研修行程作成一

3学期は、校外学習の4日目に予定されているトロント市内班別自主研修の行程を作る活動に取り組んだ(資料⑥)。先述の通り、当初はトロント市内に点在するエスニックタウンのいずれかを訪問し、その文化について調査する予定だったが、タウンの規模や治安などの事情により全ての班にエスニックタウンを割り振ることが難しいと判断した。そこで、カナダリサーチで興味が広がったことを活かし、自主研修のテーマ、キャッチフレーズ及び行程を決める活動に変更した。トロントは多様なルーツを持つ人々が互いを認め、共に暮らす都市である。よって自主研修が様々な場所・人・モノ・光景の中から異なる文化の共存を見つけ、多文化共生について考える機会となるような計画を考えさせた。

活動の手順は以下の通りである。①自主研修でやりたいことを個人で付箋に書き、クラスごとにまとめた資料を掲示する、②掲示資料もふまえて自主研修班(基準4名)を作る、③班としてやってみたいこと、行きたい場所を挙げ、実現するために調べる、④行程表と発表資料を作成する、⑤行程発表会、⑥報告会(4月)。行程表や発表資料の作成にあたっては、約40班を教員8名で分担し、指導した。

並行してカナダに関して興味のあるテーマを各自で決めさせ、調査を行ってA4用紙1枚のレポートにまとめる活動も課した。冬休みに興味のあることを3つ簡単に調べる宿題を出し、出発前にテーマを1つに絞り、さらに調べたり、現地で

見たり聞いたりしたいことについて準備させた。レポート作成は春休みの宿題としたが、作成前に1学期のレポート批評会で用いた評価表を示し、体裁・内容を向上させることを意識させた。

自主研修報告会、個人レポート発表会は、2年次の4月に設定した。2学期にPPT資料を用いたグループ発表、1学期にレポート作成を行ったが、これらの調査に関するスキルは多くの機会を体験してこそ身につくものである。確かに発表態度は以前より上達しているが、「良い聞き手」の育成は今後の課題として挙げられる。1学期には、質問が出ることは発表が悪いせいだと考える生徒もいた。2年次の始めでも発表内容を理解するのに必死だったり他の人に任せたりして、その場でコメントが言えない生徒は少なくない。他者の発表に興味を持つ段階からレベルを上げて、発表の場に主体的に関わる生徒を育てていきたい。

#### 5. まとめ

ここでは、生徒の実態から1年次の活動を終えた時点での成果と課題を簡単にまとめておく。まず本年度に重視した「①調査の基本を体験しながら学ぶことで学びのスキルを身につける」という点である。1学期のレポート作成、2学期の3回の発表を体験することで、調べたことをただまとめたり発表したりするだけでなく、「ルールを守って分かりやすく伝える」重要性に気づくことはできたが、標準的なレベルまで達しているとはいえない。しかしこれらのスキルは一朝一夕で身につくのではなく、多くの機会を設定し、その都度顧みさせることで少しずつ上達するものである。したがって発表と同様、ふりかえる時間も重視し、時間を確保する必要がある。

年間を通した課題としては、教員間の評価の揺れが挙げられる。これは「産社」や「卒業研究」など8名以上で担当する科目にも共通する。評価表によって評価項目の共通理解は図ったが、3段階ないし4段階の評価基準のすり合わせは行えなかった。どのレベルに達すれば「とてもよい」なのかというルーブリックを作成すれば統一し

た指導が可能となり、生徒に事前に示すことで達成目標にもなる。

次に「②校外学習の事前学習を通して視野を広げ、多様な価値観の中で主体的に生きる態度を養う」の前半部については、カナダリサーチを通して視野を広げ、異文化への興味を高めることができた。自分の周りに存在する多様な価値観についても AIMS との交流や他者の発表から体感している。同時に、「自分の中で外国人と言うだけで壁を作っていました、意外と自分の知っている英語や身振り手振りなどで伝わったので、外国人と言うだけでなく同じ人なんだと思いました」等の記述からは言語や文化を超えた普遍性に目を向けていることもうかがえる。

今後の課題としては、これらの多様な価値観の中で「主体的に生きる態度」を養っていくことがある。3学期の活動内容が変わり1年次の活動には入れられなかったが、「近くの牛井屋で働いている外国人が日本語をあまり話せていないので、コミュニケーション能力を發揮してカバーしたい」など、多文化の中で生きることを自分の問題として考察している生徒も少数ではあるが見られる。この当事者意識を多くの生徒が持ち、行動に移していくことができるよう働きかけていく必要がある。

以上、本年度の「CD」で重視した2点について述べてきた。これら以外に生徒が言及したこととして、学びにおける他者の存在がある。例えば「自分で読み返すだけでなく他の人に読んでもらうことで良いレポートができる」「自分のプレゼンや他のプレゼンを聞いたり発表したりして議論することに楽しさを覚えた」等である。確かに協働できなかった班もあったが(資料⑦[d])、他者に、あるいは他者とともに学ぼうとする姿勢はこれからの世界を生きていくうえで必要不可欠であろう。先に述べた課題とともに、2年次以降の学習の中で育てていきたい。

最後に、土曜日は部活動の試合が入り全ての生徒・教員が揃う日ばかりではない点、コンピュータが160名分ないため割振に苦慮している点とい

うハード面の課題も付しておく。

平成23年度から続いた「CD」はカリキュラムの改訂により本年度で終了する。次年度1年次生が横並びで取り組む科目・活動は「産業社会と人間」と「LHR」のみになるが、校外学習は1年次の同時期に実施される。本校での学びや調査に関するスキルの育成、及び校外学習の事前学習について求める水準や内容を変えるのか、変えないならどこでどのように行っていくか。1年次団だけでなく1年次必修科目や2年次以降の科目を担当する教員が考えていかななくてはならない。

#### IV. カナダ校外学習について

##### 1. 校外学習の目的

本校では、平成8年度(2期生)から約20年に渡ってアジア諸国やオーストラリアへの校外学習を行ってきた。本校の海外校外学習の目的は下記の通りである。

- ア) 自国の文化とは異なる文化圏で生活する人々との交流を通じて、異文化について学び、同時に自国の文化を見直し、多文化共生への視点を養う。
- イ) 自国とは異なる社会環境や自然環境の中で見聞を広げ、国際的視野を養うとともに、地球市民性の早期育成を図る。

本校に入学する生徒の多くが海外への渡航経験を持たない。そこで、1年次の3月という比較的早い段階で校外学習を実施することで、特に目的のイ)に掲げられている「地球市民性の早期育成」、キャリア意識の形成や、2年次以降の科目群での学びへの発展、SGHプログラムに積極的に携わる姿勢の涵養を目指している。

3年目の本年度は、前年度までのバンクーバーから東部のトロントへ訪問先を変更した。変更の理由の1つには、カナダ国内でも特に多様な背景を持つ人々が共生している地域であることが挙げられる。人口の半分程度を国外で生まれた移民が占めると言われるトロントは、本校SGHのねらいに含まれている多文化共生について街散策



やホームステイ等の実体験を通して学ぶのに適した環境だと判断した。2つ目に、市の中心地に近いところにナイアガラの滝やアルゴンキン州立公園など、カナダを代表する豊かな自然が存在しており、自然と人の共存のあり方について深く学ぶことができると考えたからである。これらを踏まえ、24期生の校外学習では、「人と人、自然が共に生きるために」というテーマを掲げ、生徒たちに視野を広げ、これからの世界でどのように生きていくかを考えさせることを目的として、現地でのプログラム、「CD」、「LHR」での事前指導、事後指導を行ってきた。詳細については「CD」の章を参照されたい。

## 2. 実施日程・プログラム

本年度は平成30年3月13日(火)～20日(火)の6泊8日の行程で実施した。スケジュールの概要は資料⑥に示している。燃油代金の高騰による影響や、年度末の他の学校行事との兼ね合いから、10日から2週間の間で実施してきた前年度までに比べてやや短い日程になったが、これまでの活動を参考にしながら下記のプログラムを設けた。

### (1) ホームステイ

22期生、23期生に引き続き、全生徒にホームステイを体験させた。2人組または3人組で、トロントから車で1～2時間程度の郊外にあるバリーやオリアの家庭に滞在した。なおカナダ到着日は体調を整えるため、帰国日前日は帰国便の搭乗に余裕を持たせるためホテル泊とした。

特に、終日ホストファミリーと過ごした週末は、



ホームステイファミリーと

アイスホッケーの観戦や、メープルシロップ収穫祭への参加、セントパトリックデーを祝うパーティーなど、各家庭の多様なバックグラウンドと生徒の興味関心に応じて思い思いに楽しんだようである。ホストファミリーとの関係は比較的良好で、出発直前に先方の都合がつかなくなったケースを除いて滞在先の変更は生じなかった。

### (2) 自然体験活動(3コース)の実施

1で記したように、日本とは異なるその国ならではの自然・環境を体験することによって見聞を広げることは海外校外学習の目的の1つであり、これまでも必ずプログラムに入っていた。今回ホームステイで滞在したバリー・オリアはトロントからさほど遠くないが、豊かな自然が広がっており、人々は自然と調和しながら生活している。そこで自然体験活動の日を設け、A カナダ自然文化体験、B カーリング・スノーチュービング、C スキーの3つのコースから希望を取って体験した。AはCAMP TAWINGOという自然教育施設で、メープルシロップの採集、雪の中の散策、先



メープルシロップ採集の様子

住民族の文化であるドリームキャッチャーづくりなどを体験した。現地施設のインストラクターは非英語話者の指導に長けており、易しい英語で説明をしてくれたため、生徒も楽しみながら先住民族の歴史も学ぶことができた。Bはカーリングとスノーチュービングというカナダ人にとって人気のあるウィンターアクティビティを半日

ずつ体験するプログラムであった。カーリングは地元のチームが指導にあたり、生徒は英語での指示も熱心に聞いていた。Cでは熟達度に分かれてインストラクターからレッスンを受けた。A～Cいずれのコースにおいても、多くのカナダ人がそうであるように、生徒たちも厳しくも雄大な冬のカナダの自然を楽しみ、人々と自然との共存について考える機会になったようであった。

### (3) トロント市内班別自主研修

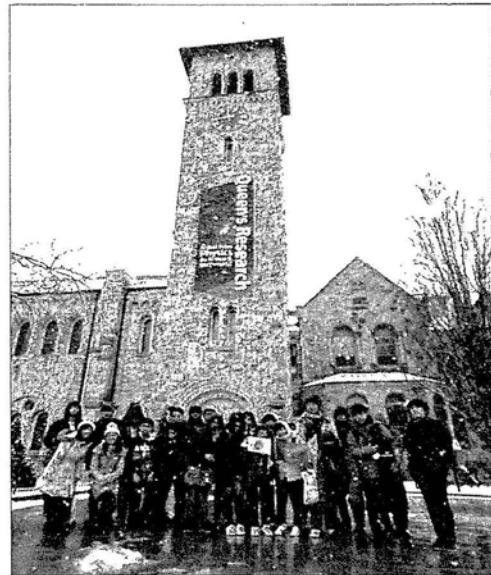
校外学習の4日目は、生徒たちが班で決めたテーマやキャッチフレーズに沿って練った行程を実践するトロント市内班別自主研修であった。多様なルーツを持つ人々が互いを認め共に暮らす都市であるトロントの特徴を生かした研修テーマ、キャッチフレーズ及び行程を決める事前学習は、CDの3学期の活動として実施した。各班は人々、文化、自然の多様性や共生の様子を見つけたり、多文化共生について考えたりできるテーマを設定し、訪問先を決定した。現地では、生徒の自主的な活動に任せた。ショッピングセンターやテーマに関する施設を見学に行ったり、現地の人に飛び込みでインタビューをしたりするなど、積極的に活動する様子が見られた。街散策の時間は実質5時間程度と短かったため、更にホストファミリーにそのテーマについて話を聞いてみる生徒も見受けられた。

事後学習は、カナダ・トロントだからこそ見られたこと、日本との違い、そこから自分たちが学んだこと、今後の日本社会や、自身の生き方、生活にどう活かすかをまとめ、PPTを用いて発表する形式で4月に実施した。今後の日本社会や自身の生き方について考えるという課題は、2年次科目「T-GAP」において身の回りの社会を構成する一員として自分に何ができるかを考え、アクションを起こすという活動へつなげることを意識したものである。

### (4) Queen's University 訪問 (SG クラス)

トロントから車で3時間の距離にあるキング

ストンにある Queen's University は、カナダ建国前の 1841 年に創設されたカナダの名門大学の 1 つである。高円宮憲仁親王が留学されていた大学としても知られている。24 期生担任団に同大学に留学経験を持つ教員がいた縁で、SG クラス 39 名が 2 日目に訪問した。なお同日に IG クラスはロイヤルオンタリオ博物館の見学とトロント市内自主研修を行っている。



Queen's University でのキャンパスツアー

内容は、日系カナダ人三世のオードリー小林教授による「カナダ日系人の歴史と多文化共生」に関する特別講義、学生によるキャンパスツアー、学食体験、日本語コース履修学生との Language Exchange (交流会) である。限られた滞在時間ではあったが、海外の大学生活を体験することができたほか、事前学習で学んだ日系人の歴史と現在のカナダの多文化共生のあり方について考えを深めた様子が見られた。

### 3. 実施上の課題

今後一層充実した校外学習を計画・実施していくために検討すべき課題について順に述べる。

#### (1) ホームステイ

事前指導が十分ではなかったことが課題としてある。心構えと生活の中で必要となる英語表現については、必修の英語の授業や事前学習の中で学ぶ機会を設けたとは思っていたものの、コミュ

コミュニケーションが上手くいかずに苦勞していた生徒も見受けられ、十分ではなかったと言える。基本的に今回のホストファミリーはホームステイの受け入れ経験が豊富で、本校の生徒の稚拙な英語もわかろうと努力してくれていた。しかし、直接的に意見や希望を伝えることを求められる英語でのコミュニケーションに慣れず、ファミリーが自分の困っていることやわからないことを「察して」くれないことに対して不満や不安を感じた生徒もいたようであった。その内向的な態度は教員の想定を上回っており、相手に自分の意思を伝える力にも未熟な部分があった。心構えや英語の会話表現について学ぶ事前学習に多くの時間を割くべきであったと考える。また、それらのスキルについても引き続き指導していく必要がある。

さらに、ホストファミリーとの会話を有意義なものにするツールとして活用することを期待して所持を禁止しなかった携帯電話・スマートフォンを用いて愚痴をこぼす生徒も散見された。今や日常生活の中に当たり前にあるデジタルデバイスを有効に使いながら、言語や文化の壁を越えてコミュニケーションを取る力を身につけてほしいと考えていたが、教員の意図が十分に伝わっていなかったようである。デジタルデバイスを安易に禁止するのではなく、コミュニケーションを促進するツールとして適切に使用できるよう、事前学習のあり方を考える必要がある。

## (2) 自然体験活動 (3 コース)

自然体験活動について課題を挙げるとすると、現地インストラクターの対応の差である。CAMP TAWINGO は現地の小中高生が自然活動を行うための教育施設ということもあり、インストラクターが生徒を指導することに熟練していた。校外学習として実施しているという意図も十分に伝わっており、ただ活動するだけでなくチャレンジを課すなど、生徒への声かけや、サポートも適切であった。一方で、スキーやカーリングのインストラクターは教育関係者ではなく、非英語母語話者に対する指示の出し方に

慣れていなかったせいか、生徒の混乱を招いたこともあった。基本的に現地での指示に基づく対応となったため、グループ分けなどに時間がかかり、体験時間の長さに差が生まれたこともあった。校外学習の一環であることから、ただ楽しむだけにならない活動にすること、非英語母語話者ということを配慮した接し方を先方に依頼できれば良かった。

## (3) トロント市内班別自主研修

自主研修は、トロント郊外のホームステイ先から都心への移動の時間がかかるため、10時から15時という正味5時間の短い活動として設定せざるを得なかった。その中で、昼食に時間が割かれてしまい、計画していた活動が十分にできず、予定を変更した班がいくつか見られた。例えば、多くの生徒が行程に組み込んでいたイートンセンターのフードコートは想定を上回る混雑具合であったために座席の確保が難しく、昼食を取るのにも時間がかかってしまった。計画段階で昼食の時間をずらすよう助言したり、行程そのものにゆとりをもって作らせたりする必要があったと言える。

また当日の動きや実際の行程について、事前学習で学んだこととリンクさせることが十分ではなかったことも課題の1つである。カナダ・トロントの多文化共生については事前学習の段階で多くの時間を割いたこともあり、多くの班がテーマや着眼点に選び、意識して街の人々の様子を観察できた。よって報告会では、多文化共生のあり方について語る班も多かった。その一方で、「CD」で2学期に行ったカナダリサーチで得た知識や関心が自主研修の活動内容につながった班は少なかった。さらに特定のテーマについてカナダと日本を比較した班も多かったが、そもそも日本に関して十分に知識はあるのか、その認識は正しいのか、ということについて事前に指導する余裕がなく、自身の日本での限られた情報のみで事実に基づかない結論に至った班もいくつか見受けられた。

#### (4) Queen's University 訪問 (SG クラス)

Queen's University 訪問では、過密スケジュール、事前学習の不足が課題である。同じオンタリオ州とはいえ、トロント市内からもホームステイ先のバリー・オリリアからも離れていることから、早朝の出発にしても滞在時間を短くせざるを得なかった。その中でも先方のご好意で多くのコンテンツを設けることができたため、忙しいスケジュールになってしまった。特に前日の長時間のフライトで疲れたせいか、慣れない英語での講義やキャンパスツアーの説明を諦め、注意力散漫になる生徒も見受けられた。旅程の関係でこの日程にせざるを得なかったが、もう少しゆとりをもったスケジュールを組めたら良かったと考える。

また、このような特別プログラムを組むにあたっては、生徒の実態に合わせた事前学習を充実させるべきであった。特に講義のテーマだった「日系カナダ人の歴史」は「CD」でのリサーチトピックの1つであったことに加えて、SG クラスを対象とした英語の授業で何度か取り扱っていた。しかし一部の生徒が質問をするに留まり、あまり定着していなかったようである。ただ知識を与え、現地で理解を深めるための質問作成を宿題として任せるのではなく、事前学習として時間を十分に確保して取り組ませることで、一層充実した大学訪問にできたのではないかと考える。

#### 4. まとめ

以上、本年度のカナダ校外学習についてプログラムごとに述べてきた。「産社」「CD」の学びを踏まえ、校外学習に臨んだ生徒たちは、現地での体験を通して多くのことに気づいた。校外学習後に、異文化や異なる価値観について感じたこと、多文化共生で印象に残っている場面とその理由、今後頑張りたいことという3項目でふりかえりを書かせた。その一部を以下に引用する。

##### 【異文化や異なる価値観】

- ・自分の目を見て、聞いて、体験したことから多くのカナダの魅力を見つけたと同時に、カナダで1週間過ごした

からこそ気づくことができた日本の良さもあった。様々な人々が共生するカナダと、独自の文化を伝承し続けることができた日本の交流が一層深まれば良いと思う。

- ・校外学習を通して感じたことは、常識は世界共通ではないということだ。
- ・(カナダでは)不親切ではないがおせっかいをしないのだ。どちらの国のほうが良いとか相手を考えているとかではないが、そういうところの文化や価値観の差を実際に感じる事ができた。

##### 【多文化共生】

- ・LGBTのカップルを街中で見かけた。彼らはとてもオープンで幸せそうだった。人と違うことを怖れて自分を隠す人も少ない。カナダ人は個人の自由を尊重し受け入れることで多文化共生を可能にしているのかもしれない。
- ・カナダに来てみて、違いを認めることがそんなに難しいことではない気がした。ただ、色々な文化を学ぼうとする積極性をカナダ人はすごく持っていると思う。
- ・1人の人として、カナダにWelcomeされ、でも日本という自分の国に誇りを持って生活できた。それはとても居心地が良かったし、大切にしてくれて嬉しかった。
- ・「〇〇人」だと思える理由とか定義とかあるけど、そんなことはどうでもよくて、自分の気持ちと、相手を尊重する気持ちが良い国を作っていくのかなと思った。
- ・違いを認め、「差」をなくすというのがあると感じた。「差」をなくすというのは、「違い」の差ではなく、その「違い」を取り巻く環境や考え方の「差」である。それをなくすことは「多文化共生」していく上で最も必要ではないかと感じた。それに対して日本というのにも考えさせられた。

##### 【今後頑張りたいこと】

- ・相手を知るよりまずは自分を知ってから周りを見れる(逆)ように出来たらいいな、と思った。たくさんの人と多く関わって、今まで知らなかった自分を見つけないと今回のカナダで強く思った。
- ・カナダ人は自国を大切にしつつ、他国のことも大切に出来る優しい人だと思う。またフレンドリーで相手の良さをたくさん見つけることができ、誰に対しても平等に接することが出来る人だと考える。私は内気なところがあるから、カナダ人のように積極的にコミュニケーションをとれる人になりたい。

- ・どんな人や物でも勝手に固定観念にとらわれず、色々な面で見ても、一つでも良い所を見つけることが大事(中略)日本では自分たちより少しでも違う人は受け入れてくれない傾向があり、自分もそうなるようになってしまったところがあった。しかしこれからは一歩踏み出して勝手な思い込みで相手との関係を断ち切ってしまうようにしないようにしたい。
- ・今後は、出かけた先で困っている外国人観光客に自分から声をかけるなど、今回カナダ人にたくさん助けてもらったように外国人を助けて自分の英語力を高められるようにしていきたい。
- ・異文化や外国人、他人をもっと理解して、どうしたらみんなにとって良くなるかを考えていけるようにしたい。自分のことも理解してもらえようもっと自己主張をしていきたいと思った。
- ・自分ひとりでは大きなことを動かすのは難しいけど、視野を広く常に持つことは自分ひとりでもできる。グローバルライフ(科目名:筆者注)や産社でもさんざん学んだが、肌でより感じられた多様性やグローバル社会を、生活する上で意識して“自分たちだけの日本・世界”にせず生きていきたい。

校外学習を通して、生徒たちは日本とは異なる文化や慣習、価値観に触れ、それまで持っていた常識を疑い、視野を広げた様子が見られる。カナダと日本の一方が優れているということではなく、自分とは異なる他者にもまた自分と異なる「正しさ」があると認識したようである。

多文化共生社会のあり方については重点的に指導していたこともあり、ホームステイや市内散策の中からその実例を多く発見し、考えを深めたようである。移民や難民を多く受け入れ、その違いをネガティブに捉えるのではなく、積極的に相手を知ろうとすることでより良い共生状態を目指し続けるカナダの姿勢を学び、日本のあり方を再考するふりかえりも数多く見られた。多様な人々と共に生きる社会において基本となる姿勢であり、校外学習の目的である「多文化共生のための視点を養う」ことは達成できたと言えよう。

もう1つの目的の「地球市民性の早期育成」については、積極的にコミュニケーションを取るこ

とや広い視野を持つこと、固定概念にとられないことで他者とつながり働きかけていきたい等の前向きな記述が見られた。これは、「CD」の章で今後の課題として挙げた「多様な価値観の中で『主体的に生きる態度』」につながっていく。カナダでの経験から、今度は自分が日本に住む外国人を理解し、サポートしたいと述べた生徒も多かった。多様性の中で生きることを「自分ごと」として認識している生徒は校外学習を経て確実に増えており、その延長線上にコミュニケーションのための英語力を向上させたいという新たな目標を設定している者もいる。自分の生きる社会を多様な人と歩む場にしていきたいといった記述が少数でも見られたことは成果と言えよう。

## V. 終わりに～本年度の成果と課題～

本年度の「産社」「CD」では、これから学び・生きていく上での原動力となる意志や興味・関心、知的好奇心を引き出し、育てることに重きを置いてカリキュラムを計画した。また単元の構成においては学期ごとに主題を設定したが、これは生徒だけでなく指導にあたる教員にとっても目的が明確になるという意味があった(資料⑦[a])。指導や活動がしやすい一因には、各単元の関連性や継続性、系統性を考慮して年間の中に配置したことも考えられる。「産社」は交流や体験、「CD」は調査と活動形態は異なるが、副担任も指摘しているように両者が相乗効果を生み(資料⑦[c])、年次目標により近づきやすくしているのではないかと。

もちろん成果だけでなく、それぞれの章に記した通り計画段階や実施上の問題点もあった。24期生担任団では卒業までに身につけさせたい10項目を決め、生徒がどの程度それらに近づいているかを測るため、入学前と1年次3月にアンケートを実施した(資料⑧)。それによると、自己の生き方や自主性、困難に立ち向かう態度等に関する項目②～④や、自分の意見を他者に伝える力(項目⑦)は全般的に上昇しているが、課題発

見・問題解決（同⑤）、知的好奇心・未知への挑戦（同⑥）、リーダーシップ（同⑩）に関する項目は変化があまり見られなかった。さらに、他者理解やより良いチーム作りなど、他者との協働に関わる項目⑧⑨では数値が減少している。

社会に出た時に一人きりで行う作業はほぼなく、その作業を行う構成員は自分で選べるわけではない。言わば、その場のメンバーで最良の結果を出すしかない。本校の学習でグループ活動を多く設定しているのは、社会で生きていくために必要な力を身につけさせるためである。高等学校では求められる内容が高度になる反面、教員の介入は中学校より少なくなり、活動がうまくいかなくても自分たちで何とかするしかない。そう考えると、このアンケート結果は現状の活動で満足していないという生徒たちの向上心の表れととることもできる。教員としても意義あるグループ活動が行えたという実感を生む方法を工夫していく必要があるだろう。

今回は校外学習前にアンケートを実施したため、校外学習を経た生徒たちの変容に関する詳細は次年度の「T-GAP」とあわせて報告したい。

「産社」で自らの生き方を考え、「CD」で多角的なものの見方の重要性を知った生徒たちは、カナダで体験と知識のギャップに気づくとともに多様性を体感し、唯一絶対の価値観がないことを知った。今後は、まず自分は何をすべきなのか、何ができるかを考えさせたい。そのためには、新聞やニュースなどのメディアを活用し、身の回りのことや地域社会、地球レベルの事象を知る必要があるが、1年次の段階では非常に関心が薄いのが現状である。各々の興味は、まだ身の回りの小さな対象に限られた側面からの見方に過ぎない。若い時期、特に高校3年間のうちの2年次では大きな視点と健康的な野心をもって、背伸びをしても広い世界に興味を持ってほしい。その興味が、様々な人・もの・機会・価値観に出会えるチャンスを生むからである。このことを2年次から始まる選択科目や「T-GAP」の中で体験させ、「全局的人間」としての資質向上につなげられるよう

働きかけていきたい。

【資料①】「産業社会と人間」年間指導計画

H29 産業社会と人間 年間指導計画							
	No	月	日	主題	単元	各時限の内容	
						5時限	6時限
一 学 期	0	4	8-11	自然体験を通して友情を深める	コミキャン	コミュニケーションキャンプ	
	1	4	14	「産業社会と人間」を知る	オリエンテーション	科目群オリエンテーション	ガイダンスブックを見てみよう
	2	4	22(土)	生物育成を通して命と生活を考える	協同体験	産社菜園作り(種蒔き)	
	3	4	28	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	探求①社会について	自在への階梯①イントロ～私のカルテ作成	
	4	5	12	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	探求①社会について	自在への階梯②～グループディスカッション	
	6	5	26	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	探求①社会について	自在への階梯③職場・施設訪問班作り～計画	
	7	6	3(土)	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	探求①社会について	自在への階梯④プロフェッショナルの話聞く	
	8	6	9	科目選択を考える	科目選択	科目群主任講話/科目選択の諸注意	
	9	6	16	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	探求①社会について	自在への階梯⑤職場・施設訪問計画～アポ取り	
	10	6	23	科目選択を考える	科目選択	科目選択予備調査入力	1学期振り返り
	11	7	11(火)	生物育成を通して命と生活を考える	協同体験・探求①	収穫祭準備&自在への階梯 職場・施設訪問直前指導	
	12	7	15(土)	生物育成を通じて命と生活を考える	協同体験	菜園収穫祭(保護者と一緒に)	
		夏期休業中	実社会の中で「仕事」を体感する	探求①社会について	自在への階梯⑥活動		
		夏期休業中	実社会の中で「仕事」を体感する	探求①社会について	自在への階梯⑦振り返り作業		
二 学 期	1	9	1	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	科目選択	自在への階梯⑧振り返り準備・スタディサポート	
	2	9	8	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	進路学習	自在への階梯⑨でディスカッション発表会	
	3	9	15	将来の夢を見つける、未来の自分と向き合う	自己・人間理解	自在への階梯⑩ポスターセッション発表会	
	4	9	22	学問に向き合い、自らの生きる道を考える	探求②自己について	無限への回廊①イントロダクション・筑波大見学紹介	
	5	9	29	学問に向き合い、自らの生きる道を考える	探求②自己について	無限への回廊②進路講話・受験科目の調べ方	
	6	10	6	学問に向き合い、自らの生きる道を考える	探求②自己について	無限への回廊③未開の才能	
	7	10	13	学問に向き合い、自らの生きる道を考える	探求②自己について	無限への回廊④ 筑波大見学	
	8	10	20	科目選択を考える	探求②自己について	科目群ガイダンス	
	9	10	27	学問に向き合い、自らの生きる道を考える	探求②自己について	無限への回廊⑤ 福祉講話(熊倉先生・ゲスト)	
	10	11	10	科目選択を考える	国際理解	AIMS来校準備(産社・キャリア合同企画)	
	11	11	21火	学問に向き合い、自らの生きる道を考える	探求②自己について	特別支援校との交流会	
	12	11	24	他者との関わりから、生き方を考える	まとめ・探求③	2学期振り返り・縁起の海で生きるために①イントロ	
三 学 期	1	12	1	科目選択/他者との関わりから、生き方を考える	科目選択・探求③	授業時間割入力	縁起の海で生きるために②
	2	12	6水	他者との関わりから、生き方を考える	探求③つながりについて	縁起の海で生きるために③「自分をめぐる縁起」作成	
	3	12	15	他者との関わりから、生き方を考える	探求③つながりについて	縁起の海で生きるために④「私の人生論」作成	
	冬期休業			他者との関わりから、生き方を考える	探求③つながりについて	「私の人生論」宿題	
	4	1	12	他者との関わりから、生き方を考える	探求③つながりについて	「私の人生論」HR発表①	
	5	1	19	他者との関わりから、生き方を考える	探求③つながりについて	「私の人生論」HR発表②	
	6	1	26	他者との関わりから、生き方を考える	探求③つながりについて	「私の人生論」HR発表③・振り返り	
	7	2	2	他者との関わりから、生き方を考える	探求③つながりについて	「私の人生論」年次発表会	
	8	2	9	1年間の学習内容を振り返る	まとめと発表	研究大会準備&リハーサル	
	9	2	16	1年間の学習内容を振り返る	まとめと発表	研究大会発表会前日準備	
	10	2	23	1年間の学習内容を発表する	まとめと発表	研究大会	
11	3	2	1年間の学習内容を振り返る	全体まとめ	産社総括・振り返り		

【資料②】「産業社会と人間」・「生き方カルテ」を作ろう

カルテ（表）

Life Design – My Personal Record (KARTE)		"Industrial Society & Human" (2017) Tsukusaka 24 <sup>th</sup>	
<div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">                     Photograph                 </div>	Name : _____	Junior High School : _____	
	Class / Attendance No. : _____	Hobbies and Likes : _____	
	Camp Name : _____	Clubs and Committee : _____	
	Date of Birth : 20 ____ / ____ / ____	Favorite Area of Subjects : _____	
★ Your dream / interests 憧れる人・興味のある分野・職種		★ What I treasure in my life...生きていく上で大切にしたいこと	
_____ _____ _____		_____ _____ _____	
		_____ _____ _____	
★ What I want to know... 見たい・聞きたい・知りたいこと		★ What made you think so... 理由やきっかけ、または過去の体験	
_____ _____ _____		_____ _____ _____	
		_____ _____ _____	

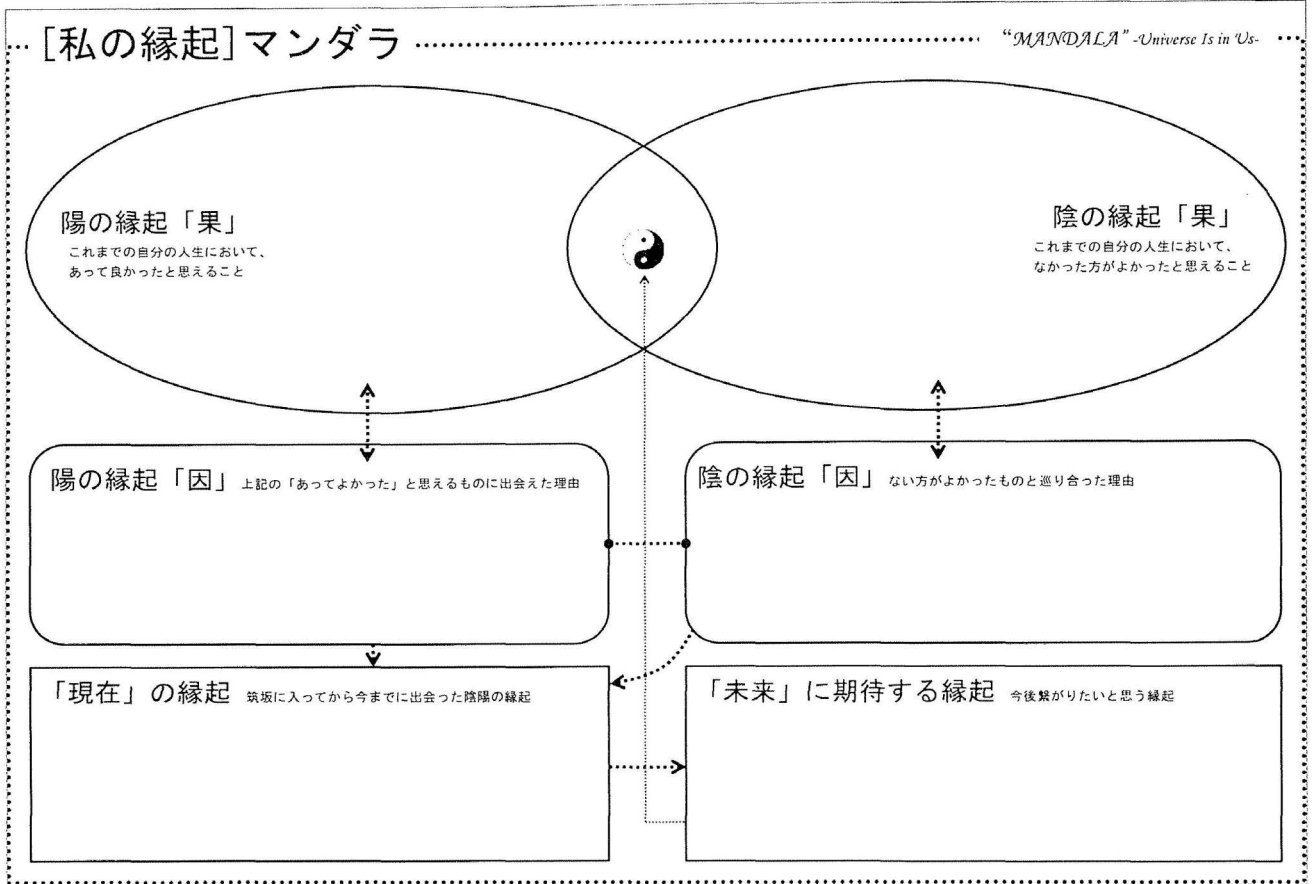
カルテ（裏）

★ Job, Career, Calling: Key to Happiness and Meaning at Work 将来つきたいと考えている職業・業種など	
I	_____
II	_____
III	_____
★ The Place to Gain New Perspective 実際に訪問したい施設や企業、団体や人々など / その理由・あるいは訪問先でどのようなことを見たい、聞きたいか	
①	理由・内容 : _____ _____
②	理由・内容 : _____ _____
③	理由・内容 : _____ _____



【資料③】「産業社会と人間」・縁起の海で生きるために

[a] 過去と現在、未来を整理するためのワークシート



[b] [a] から内容を選択するためのワークシート

246 産業社会と人間 3rd Edition ~留陰・思索・礼節~ 1年 組 番 名前

『縁起の海で生きるために。』事前準備シート

## 自分をめぐる縁起【提出用】

I ここまで書き出したことをまとめ、1枚の紙上に表してみよう。

これまでの自分に關わる出来事や人の意味、自分という人間や今の思い、この先つながりたいものなど、気づいたことや発見した関係性を、自由な形式で書いてみよう (ex. 図・箇条書き・キーワード etc)。

※切 12/15 (金) 各担任まで提出すること。

【資料④】「キャリアデザイン」年間指導計画

No	月	日	主題	単元	各時限の内容	
					1時限	2時限
1	4	21	科目を知る	科目ガイダンス	科目の目標と内容、R-CAP受験	
2	5	13	筑坂で学ぶ基礎をつくる・ 社会に目を向ける	リサーチガイダンス①	農業・生活系、工学・人文系の研究の特徴	
3	5	27		リサーチガイダンス②	テーマの決め方、レポート・発表のマナー	
4	6	21		個人調査①	テーマを決め、計画を立てる	
5	6	10		個人調査②	複数の資料で調べる	
6	6	17		個人調査③	複数の資料で調べる	
7	6	24		個人調査④	複数の資料で調べる	
8	7	1		発表／レポート作成	調べた内容を発表し、討議する	
9	7	14		発表／レポート作成	発表時の助言を参考にレポートを完成させる	

7/20レポート提出

10	9	2	様々な人・世界との交流を通して、 自分を見つめ直す  ※11/10(金・産社)AIMS交流準備	スタディ・サポートテスト	
11	9	16		レポートを読み合う	相互評価を元にレポートを推敲し、提出する
12	9	30		カナダリサーチガイダンス	カナダに関する講義、文献講読の方法を知る
13	10	7		文献講読①	班とテーマを決定する
14	10	14		文献講読②	資料作り・発表準備
15	10	21		文献講読③	文献講読発表①
16	10	28		文献講読④(1限) / カナダリサーチ①(2限)	文献講読発表② / カナダリサーチガイダンス
17	11	4		カナダリサーチ②	調査・資料作り
18	11	11		AIMS Meet and Greet!	筑波大東南アジア留学生との交流
19	11	18		カナダリサーチ③	分野別発表会

21	12	9	※12/8(金・産社)発表会準備 その他、LHRの時間にも校外学習関連の活動を行っている。  多様な個からなる集団の中で、どう生き・ 行動すべきかを考える	カナダリサーチ③	分野混合発表会	
22	12	16		カナダリサーチ④(1限) / 自主研修行程作成①(2限)	発表ふりかえり / 活動に関するガイダンス	
23	1	13		進研模試		
24	1	27		自主研修行程作成②	8グループに分かれ、計画書を作成する。	
25	2	3		自主研修行程作成③	計画書提出、発表会準備	
26	2	10		卒業生と語る会		
27	2	17		自主研修行程作成④	自主研修行程発表会(研究大会)	
28	3月～			校外学習事前準備、直前指導		
30				校外学習		

【資料⑤】「キャリアデザイン」1・2学期の評価項目

[a] 1学期のレポート評価項目

（キャリアデザイン）月 日

レポート評価表

レポート作成者	レポート名	調査・フックレポート
評価者		※○をつける

※評価基準 ○：素晴らしい ○何とかがOK △改善点多し ×努力せよ！

【体裁・構成】

1	体裁を守っている (明朝体10.5ポイント、1～3行目に書くべき内容、常体etc)	
2	構成を守っている(以下の内容が入っている) * 調査：調査の動機・目的・方法、調査結果、考察、参考文献 * フックレポート：自分の興味or選択理由、書誌情報、要約、考察	
3	段落があり、始めの1字を下げている。	
4	参考文献、webの表記が適切である。 * 本：著者名『書名』出版社、出版年 * web：「サイト名」http://～	

【内容：調査】

5	本・webの文章と自分の文章を区別していることが読み取れる。	
6	調査目的と結果、考察(結論)が一貫している。	
7	十分な調査が行われ、考察の根拠が適切である。	

【内容：フックレポート】

5	要約は部分なのか、全体なのかを示している。	
6	引用する際、ページ数の表示や「」を使うなどして示している。	
7	感想でなく、具体的に考察している。 * 内容について賛否・是非などを根拠をあげて説明している。 or 疑問に思うこと・さらに調べたいことを具体的に示している。	

【コメント：良い点・改善点(アドバイス)】

--

[b] 2学期の発表評価項目

「キャリアデザイン」分野混合発表会(12/9)記録シート

1年( )組( )番( )

【知事(やり)】 発表の組み上げでなく説明を、ゆっくり明確に、相手に伝わっているか確認しながら進める。  
【聞き手(やり)】 トークンをメモする。質問がないか聞きながら聞く。他者の発表内容や仕方を聞きながら評価し、  
【 】中に3段階で記入する。評価は3段階。◎：とてもよい ○：ふつう △：努力を要する

1年( )組( )番( )	発表者	コメント・メモ
【内容】 構成に必要なものが入っている。	【 】	【 】
【内容】 文獻情報をもとに調査が行われ、考察の根拠が適切である。	【 】	【 】
【資料】 発表資料が見やすいく、わかりやすい。 ※ 図表書き、文書、図解的な図	【 】	【 】
【聴感】 音響きれい、声の大きさ、高さ、スピードが適切である。	【 】	【 】
【態度】 表情を認め上げられるのではなく、伝えるよう心がけている。	【 】	【 】
2年( )組( )番( )	発表者	コメント・メモ
【内容】 構成に必要なものが入っている。	【 】	【 】
【内容】 文獻情報をもとに調査が行われ、考察の根拠が適切である。	【 】	【 】
【資料】 発表資料が見やすいく、わかりやすい。 ※ 図表書き、文書、図解的な図	【 】	【 】
【聴感】 音響きれい、声の大きさ、高さ、スピードが適切である。	【 】	【 】
【態度】 表情を認め上げられるのではなく、伝えるよう心がけている。	【 】	【 】
3年( )組( )番( )	発表者	コメント・メモ
【内容】 構成に必要なものが入っている。	【 】	【 】
【内容】 文獻情報をもとに調査が行われ、考察の根拠が適切である。	【 】	【 】
【資料】 発表資料が見やすいく、わかりやすい。 ※ 図表書き、文書、図解的な図	【 】	【 】
【聴感】 音響きれい、声の大きさ、高さ、スピードが適切である。	【 】	【 】
【態度】 表情を認め上げられるのではなく、伝えるよう心がけている。	【 】	【 】

※構成に必要なもの：「タイトル・メンバー情報」「担当テーマに関する興味・関心」「調査結果」「考察」「参考・引用文献」

【資料⑥】「カナダ校外学習」日程表

日程概要						
	月日	都市名	時間	交通機関	行 程	食事・宿泊
1	3月13日 (火)	羽田空港 羽田空港 トロント空港 トロント郊外	15:30 18:40 17:40 19:00	AC006 専用車	羽田空港（国際線ターミナル）に集合 エアカナダ直行便にて、トロント空港へ  到着・入国手続後、空港内&空港近くのフードコートにて夕食（各自） 【ヒルトントロント エアポート宿泊】	機内食（2回） 夕：各自  【生徒：空港ホテル】 【教員：空港ホテル】
2	3月14日 (水)	キングストン OR  トロント市内  トロント郊外 (バリー周辺)	終日 17:00	専用車	《キャンパスツアー& トロント市内班別研修》 ①号車（D組） キングストン：クイーンズ大学訪問（終日） ②～④号車（ABC組） AM トロント大学キャンパスツアー&オンタリオ州博物館（入場） PM イトワタ周辺にて自由行動（各自昼食）  ホームステイエリア（バリー・オリリア）に到着、ホストファミリーとご対面・各家庭へ	朝：ホテル 昼：各自 夕：各家庭  【生徒：ホームステイ】 【教員：バリーホテル】
3	3月15日 (木)	トロント郊外 (バリー周辺)	終日	専用車	《選択アクティビティ&語学研修プログラム》 (希望制コース別選択プログラム) ①スキー体験 ②カーリング体験&スノーチュービング体験 ③CAMP TAWINGO～カナダの自然・文化体験～	朝：各家庭 昼：サクランチ 夕：各家庭 【生徒：ホームステイ】 【教員：バリーホテル】
4	3月16日 (金)	トロント市内	10:00 ～ 15:00	専用車 各自 専用車	《トロント市内 班別自主研修》	朝：各家庭 昼：各自 夕：各家庭 【生徒：ホームステイ】 【教員：ホテルトロント】
5	3月17日 (土)	トロント郊外 (バリー周辺)	終日		ホストファミリーとの思い思いの休日	朝・昼・夕：各家庭 【生徒：ホームステイ】 【教員：ホテルトロント】
6	3月18日 (日)	ナイアガラ トロント市内	終日 17:00	専用車	《ナイアガラの滝 観光》 ホストファミリーとお別れ、集合場所よりバスにて出発、ナイアガラへ テーブルロック&ジャーニービハインドザフォールズ（滝の裏側入場） クリフトンヒル周辺にて自由行動（昼食・買物） (※希望者のみレインボーブリッジ国境越え体験)  【夕食】ホテル宴会場にてバイキング(予定)	朝：各家庭 昼：各自 夕：ホテル  【生徒：ホテル】 【教員：ホテル】
7	3月19日 (月)	トロント市内 トロント空港	午前 14:35	専用車 AC005	ホテル出発、専用車にて空港へ トロント空港より、エアカナダ直行便により空路帰国の途へ	朝：ホテル 機内食 2回
8	3月20日 (火)	羽田空港	16:55		羽田空港到着・入国手続後、解散	

## 【資料⑦】 副担任から見た 24 期生の実践

1 年次の担任団として本年度の実践にあたってきた副担任が、「産業社会と人間」「キャリアデザイン」に取り組んだ生徒の様子や計画・運営上の成果や課題を記した。

[a] 今年度の「産業社会と人間（以下「産社）」では、これまで一年間の大きな 1 つのストーリーとして進められていたものを三部に分けたことが興味深い取り組みだった。この取り組みは生徒だけでなく何度も授業を作ってきた教師側にも影響があった。一年間を三部に分けたことで、以前は長い登坂のように感じられたプログラムの流れが階段状に変わり、段階の変わり目が明確になった。それにより授業の目的と、その目的に対する切り替えが個人的には行いやすかった。

印象に残った「産社」・「キャリアデザイン（以下、「CD）」のプログラムとして以下の 3 つを挙げたい。まず、「産社」の保護者による講演である。保護者が授業を参観することはあっても、講師として生徒に講演をするのはこれまでになく新鮮だった。学校という場で教師と保護者がタッグを組み、形となった点が面白かった。次に、同じく「産社」での職場・施設訪問である。体験先を自分たちで探すことそのものが学習になっていた上、自分たちで決めたことへの責任も生まれた。一方で職場ごとにプログラムの趣旨の受け止め方に違いがあり、充実した体験ができた生徒もいれば、そうでなかった生徒もいたようである。最後に「CD」から「AIMS 学生との交流」を挙げる。不安と言葉の壁を越え、他者との交流ができた。まさに体験から学ぶプログラムであり、多くの生徒がコミュニケーションを取ることを楽しんでいた。

（数学科 小澤真尚）

[b] 24 期生「産社」の目標は、①「分別度」を高め自在にあやつる、②1 年間を通して自分の未来や幸せを考えると設定されている。つまり、1 年間で多くの活動を経て、多くの経験をし、今後の人生について考えることを目標としている。しかし物事多く経験を積ませれば良いわけではなく、生徒一人ひとりがその体験から得た知識や知見を今後の活動や生活に活かせるように、ひとつの物事に対して考えさせる時間をもたせること、活動を通して丁寧にフィードバックをする必要性を感じた。

「産社」の内容は、社会理解、自己・人間理解、進路学習の 3 つに大きく分けることができる。そのうち進路学習の中の「私の人生論」を考える単元において、大きな変化がみられた女子生徒を紹介する。女子生徒は入学当初から学校を休みがちで、人間関係や勉学の悩みを抱えていた。本科目の特性上、グループ活動が多いため、同じ班のメンバーとの関係を構築できない姿も見受けられた。また、自身の人生観について漠然と考える節もあり、今後の生活に希望を見出せずにいた。本単元はこれまでの授業形態と異なり、自分がいかに自分を見つめ直せるかに重きを置いており、生徒ひとりで行う学習形態である。これが、今まで友人に語るができなかった気持ちのうちの晒すきっかけとなり、更には自分の思考を深化させた。グループ活動の際にも単元ごとに自分で考える時間を設けている。その個人の時間が不十分だったのか、個人活動の後にグループ活動が控えていることを知った上で周囲の友人に流されてしまったのか、実際は明らかではない。しかし自分自身と対話する時間を設けたことがこの女子生徒の変化につながったと考えられる。

「CD」では、1 学期に行った個人調査に焦点を当てる。1 学期当初の生徒は、与えられた課題をただこなす・受け身の姿勢であった。リサーチガイダンスを経て、研究の身近さ、身の回りの疑問点から研究に発展することの面白さを知り、探究心が上がったように思える。しかし研究に対してモチベーションが上がったものの、行事の都合で日にちがあき、研究意欲が高い状態で個人調査に取り組めなかったことは反省点の 1 つである。個人調査では、中学校では学んでこなかった研究の基礎や客観性の重要性、レポートの書き方までもが指導の範囲となる。副教材『学びの技』に準じて指導するため、生徒の最終レポートの出来栄は、教員差の生じないものとなった。1 名の教員に対して 20 名の生徒が割り振られたが、6 日間の授業時間内で十分に指導可能な配当であった。最終レポートの提出を終えた生徒の振り返りのコメントからは教員の指摘以外にも自身の気づきが多々見られたが、これらは研究・レポートのみならず普段の生活にも生かせるものであった。（家庭科 山本直佳）

[c] 24 期生のカリキュラムでは、「産社」において「相手を知る・受け入れる・それぞれを生かす」こと、「CD」において「知識・リサーチスキル・分析（批判的思考）・判断」を育成し、課題設定から試行錯誤を繰り返すことで、実践・解決を自ら行動する力を養うことが目指されている。

「産社」については、1 学期の「自在への階梯」での生徒の変容に着目する。夏休みに、ある現場を訪問し、体験する活動があった。ここに至るまでに、生徒一人ひとり将来を見据えて自身のカルテを書き、興味関心に基づきグループを作り、訪問先を決定した。活動後のふりかえりでは、「もっと自分自身で考えて、自分が本当に好きなことを見つけて進路を決めたいと思った」、「選択の幅が広がった」、「(訪問した分野に今までは) 興味はなかったけど、今回、自分の新たな可能性を感じる事ができました」などの記述が見られた。実際に五感で体感したことから、自分の将来の選択を幅広く考えることができるようになってきている生徒も多かった。訪問後に行われたポスターセッションでは、訪問先についてメンバーと協力してポスターを作成、発表し、感じたことを伝えること・聴くことを通して、「現場」の共通点や特殊性を見出すことができたと考える。この単元では、「現場」についての興味関心の深化のみならず、メンバーとの協働を通して、自己の在り方生き方についての認識を深めることができたのではないかと。

「CD」については、2 学期のカナダリサーチを取り上げる。生徒のコメントや調査・発表の様子から、1 学期に学んだ調査や発表におけるスキルについての認識が、カナダリサーチで深化したと見ることができる。しかし、個人差はあるものの、スキルが完全に身につけているとはいえない。ふりかえりでは「積極的に取り組めたが、発表等の改善点が多い」、「カナダへの興味・関心は持てたが、発表がまいちだった」、「日本と比較があまりできていなかった気がする。他の発表を聞いて、以前より、カナダに対して興味や知りたいことが増えた」などの記述がみられた。また全体を通して、最低限守ることとされた「段落のある文章・引用のルール・発表のマナー」についての課題を挙げている生徒が散見されることから、この点に関する改善は必要であるように考える。今回、カナダリサーチでは発表の機会が計 3 回設定された。この 3 回で内容も発表スキルの修正も見られたが、時間の制約の中で、発表ごとに振り返りを生徒の中で分析・反省を促す機会を設けることも改善策の 1 つになりうるのではないかと。

最後に「産社」と「CD」は別のコンテンツであるが、進んでいくにつれ、それぞれで学んだことが生徒の中で融合されているように思う。2 つの学習活動の成果が相乗効果を生んでおり、今後の自分自身を見つめることやカナダ校外学習での活動でもいかされると考える。(地歴公民科 高畑啓一)

[d] 「産社」が導入され約四半世紀、社会人講話や職場体験は必須の単元として取り入れられてきた。しかし導入当時は生産性の低下や安全性などを理由に、社会からは受け入れられない状況にあった。よって講師や職場は学校が準備し、それを生徒が選択する形をとってきた。ところが企業が環境への配慮を前面に打ち出すのと同時期に、社会貢献や地域貢献に取り組む企業がふえてきた。その結果、職場体験等は実施しやすくなったものの形骸化してきたことは否めない。

そこで、今年度は生徒自身が①希望する場所を選び、②共に体験する仲間を募り、③グループで相談し企業などのアポを取って訪問するといったスタイルに変えた。担当した班を見る限りでは「学校からの依頼でないと受け入れられない」「対応できない」といった受け入れ先の問題や、意見がまとまらず訪問先が決まらないケースも見られた。その結果、既成の体験講座や施設見学をネットから探し申し込む班があったのは残念であった。ただいくつかの問題点はあるが、生徒が訪問先を開拓することは今後も続ける価値がありそうである。

「CD」のカナダリサーチでは、担当をくじ引きで決めた。これはテーマもメンバーも無作為に決められるという試練（ミッション）を通して協働する力をつけることを目標とした。発表会というタイムリミットがあったため多くの班は協働を余儀なくされる中、調査・パワーポイント・発表と仕事を分担したり、各班員が調査を行い一人ずつ交代に発表し、お互いを干渉したりしないよう進めた班もあった。さらにある班は、当日公欠者や病欠者が出て発表者が一人しかおらず「自分のところ以外はわからないのでパワーポイントを読んでください」という発表になった。また、調査や発表も回が重なるに連れ充実していったが、カナダの比較対象としての日本の調査が不十分であった班もいくつか見られた。

「産社」や「CD」だけが本校におけるアクティブ・ラーニングではないが、この両者が生徒の能動的学習力を育てているのは確かである。その要因となっているのが協働ではないだろうか。これらの学習活動で行われるグループワークはまさに協働の体験である。同じ方向を向いた生徒同士の協働もあれば、異なったベクトルを持った者による協働もあり、協働を通して生徒たちはこれまでにない力を身に付けている。しかし、このような力は「産社」や「CD」以外の科目でも得られないわけではない。この「産社」や「CD」で必要なもう一つの協働とは教師の協働である。他の科目、他の授業でもチーム・ティーチング（TT）は実施されているが「産社」や「CD」のように担任団8名で展開される科目は数少ない。そのためには毎回の打ち合わせや議論が必要になるのだが、それを通して、また授業を行うことにより担任団が活性化していく。TTにあたり教師側の協働ができていることが、生徒の協働力さらには真の学力の育成につながるのではないだろうか。また、指導者自身も協働を通して自らの教育力を向上させることになるのである。（農業科 嶋田昌夫）

### 【資料⑧】 事前アンケートと年度末アンケートについて

アンケートは入学者説明会（平成29年4月3日、162名）と校外学習出発前の3月（平成30年3月2日、158名）に実施した。各項目について「4：そう思う」から「1：そう思わない」まで4段階で回答させ、さらに肯定的回答を選択した者には、その力や姿勢が学校生活のどの活動や場面（例：「産業社会と人間」の大学見学、部活動など）で特に発揮されたか、あるいは身についたかを複数回答で聞いた。全10項目と結果は以下の通りである。なお、事前アンケートでは「～できるほうだ」という文末表現で尋ねている。

#### 【質問項目】

- ①緊張や不安を感じるような慣れない、または新しい環境の中で自分なりに活動できましたか
- ②性格や将来など、自分自身のことについて考えることができましたか。
- ③人に言われてではなく、自分で考えて行動することができましたか。
- ④困難なことがあってもあきらめず、最後までやり遂げようと努力することができましたか。
- ⑤課題や問題を見つけ、解決や改善に向けて行動することができましたか。
- ⑥いろいろなことに興味を持ったり、新しいことへの挑戦を楽しんだりできましたか。
- ⑦他の人に自分自身の気持ちや考えをことばで伝えることができましたか。
- ⑧相手の身になって気持ちを理解したり、助け合って活動したりできましたか。
- ⑨メンバーの特徴や状況を考え、よりよいグループにするために協力することができましたか。
- ⑩グループ活動を円滑に行うために、進んでリーダーシップをとることができましたか。

#### 【結果】

種別/回答	4	3	2	1	平均	種別/回答	4	3	2	1	平均
事前1	62	63	25	10	3.11	事前6	81	60	16	4	3.53
事後1	54	76	21	6	3.13	事後6	79	52	20	5	3.31
事前2	56	78	25	3	3.15	事前7	36	59	48	19	2.69
事後2	95	48	11	3	3.5	事後7	51	59	42	4	3.01
事前3	10	80	65	7	2.57	事前8	49	92	15	6	3.14
事後3	33	72	46	5	2.85	事後8	37	80	32	7	2.94
事前4	39	82	32	9	2.93	事前9	58	84	16	4	3.21
事後4	46	77	28	6	3.04	事後9	46	66	36	6	2.99
事前5	23	89	44	6	2.8	事前10	22	51	61	28	2.41
事後5	33	74	41	5	2.88	事後10	22	44	61	29	2.38